セルフヘルプグループ(SHG)論の批判的検討

―ひきこもりサミットの「当事者研究」を通じて―

川 田　八 空

目次

はじめに

１．SHG について
　１．１　SHG とは
　　１．１．１　SHG の思想的起源
　　１．１．２　欧米における SHG の歴史と展開
　１．２　SHG という援助形態
　　１．２．１　SHG の特徴
　　１．２．２　日本における SHG の歴史と展開

２．「当事者研究」について
　２．１　「当事者研究」とは
　　２．１．１　「当事者研究」のはじまり
　　２．１．２　べてるの家における「当事者研究」成立の背景
　２．２　「当事者研究」という方法
　　２．２．１　「当事者研究」の特徴
　　２．２．２　なぜ「当事者研究」なのか
　２．３　ひきこもりサミットの「当事者研究」の手順

３．ひきこもりサミットの「当事者研究」
　３．１　ひきこもりサミットと「運営の困難さ」
　　３．１．１　ひきこもりサミットとは
　　３．１．２　ひきこもりサミットの「運営の困難さ」
　３．２　本研究における「当事者研究」の方法論
　３．３　「当事者研究」の実践
　３．４　「運営の困難さ」に対する処方箋

４．SHG 論の批判的検討
　４．１　「SHG 運営の困難さ」について
　　４．１．１　「SHG 運営の困難さ」の社会的構築
　　４．１．２　「SHG 運営の困難さ」に対する処方箋としての「当事者研究」
　　――SHG を「わたしたちのグループ」としてとり戻す！
　４．２　SHG 論をずらす
　　４．２．１　SHG の本質を問い返す―SHG は援助形態なのか
　　４．２．２　“原初的な SHG”というあり方―「自分たちのための」活動をとり戻す！
　４．３　「生きるための技法」について
　　４．３．１　ぼくと「生きるための技法」―ぼくにとっての SHG・「当事者研究」
　　４．３．２　専門的知識と「生きるための技法」―SHG の事例から

４．３．３　「当事者研究」が「制御」されないために

おわりに

参考・引用文献

図表

はじめに

セルフヘルプグループ(以下、SHG と表記)という言葉をご存知だろうか。SHG は他にも、自助団体や自助グループと呼ばれることもある。いずれにしろ、これらの言葉を知っている人はあまり多くないと思われる。たとえ知っている人でも、SHG は、「病む人々の「あつまり」」(岡 1992: 129)というような印象を持っている方が多いのではないだろうか。

筆者は以前、ひきこもりサミットという SHG の運営者として、「運営の困難さ」に直面した経験がある。そして、「どうすれば、よりよいグループにできるか」という興味・関心に基づいて「研究」をしたのが川田(2017)のレポートである。その結果、「なぜ、SHG の運営者だからって、自分がわざわざしんどい状態にある人達のケアをしなくてはならないのか」という素朴な疑問が自分の中で生じた。「運営者だって楽しい活動をしたい。自分と同じように、同じ問題を抱える人が相互援助のために集まる SHG というところで運営者として活動する他の多くの人達は、活動していて楽しいのだろうか」ととても不思議に思った。

従来の SHG 論では、「共通の問題をもつ当事者」(久保 1998: 8)が集まって、経験をわかちあうなかで、当事者の「回復」が達成されていくとされている。たしかに、客観的な視座からはそのように見えるのかもしれない。では、従来の SHG 論に則るならば、筆者のような虐待サバイバー、不登校・ひきこもり、躁うつ病など、複合する当事者性を有する者は、それぞれ該当する SHG を１つずつ訪ねて回り、まさしく共通の問題をもつ当事者と話すことによって得られる「深い共感」を通して、よく「回復」することができるというのだろうか。たとえそうだとしても、筆者は自分と共通の問題をもつ当事者からなる SHG に好んで行きたいとはどうしても思えない。自分と共通の問題をもつ当事者からなる当事者グループは、自分には却って居心地が悪そうで、その空間を楽しめる気がしないからだ。

本論では、「SHG 化」によって「運営の困難さ」が生じたひきこもりサミットという当事者グループにおいて、運営者であった筆者がメンバーと共に、「運営の困難さ」に関する「当事者研究」を行う。その実践から、ひきこもりサミットの「運営の困難さ」の解決方法を明らかにし、また、ひきこもりサミットの「当事者研究」の実践から、従来の SHG 論を批判的に検討する。筆者は、「研究」にとりかかる際、「そもそも、SHG とは、共通の問題をもつ当事者で組織する必要はなく、「自分自身を生きたい！」という強い意志を持つ当事者で集まれば、それがどこであれ、そこにはセルフヘルプな空間は生じる」という仮説を立てた。従来の SHG 論に合うようにひきこもりサミットにおける自らの経験を編集することなく、SHG 論という大きな枠組みの中で、ひきこもりサミットの「当事者研究」の成果から語れることを自由に語り、従来の SHG 論をずらしていく。それが、本論の目的である。

１章では、SHG に関する先行研究をまとめ、本論における SHG という用語が指す概念を確定する。また、本論が扱うひきこもりサミットの「当事者研究」という実践を、従来の SHG 研究の中に位置づける。２章では、「当事者研究」に関する先行研究をまとめ、なぜ、本論が特に「当事者研究」という方法を用いるのか理由を明らかにする。また、べてるの家の「当事者研究」の手順を参考として、ひきこもりサミットの「当事者研究」の手順を作成する。３章では、その手順を基に、ひきこもりサミットの「当事者研究」を行い、筆者が感じていた「運営の困難さ」の解決方法を明らかにする。最後に４章では、ひきこもりサミットの「当事者研究」を手がかりとして、従来の SHG 論をずらしていく。

１．SHG について

本章の目的は２つある。１つ目は、本論でSHGという概念が示す射程を明示することだ。そのために、１節で欧米発祥とされているSHGの歴史を確認し、２節１項で先行研究の機能や定義を概観し、本論におけるSHGという概念を定義する。２つ目は、従来のSHG研究の歴史の中に、本論が扱うひきこもりサミットの「運営の困難さ」の「当事者研究」という実践を位置づけることだ。そのために、２節２項で日本のSHG研究の歴史を確認する。

１．１　SHG とは

１．１．１　SHG の思想的起源

SHGとは、「元来、外来の思想」(岡 1992: 119)であり、その思想的起源はスマイルズの『自助論』(1858年)とクロポトキンの『相互扶助論』(1902年)の２つに求められることが多い(岡 1990a, 1990b, 久保 1998)。三島(1997: 83)は、２つを「異なる対照的な流れ」とし、SHGの思想的背景にはスマイルズの『自助論』にみるような「個人個人が自らの力で自分自身の問題を解決していくという個人主義的な方向性」と、クロポトキンの『相互扶助論』にみるような「助け合いの中で社会を変えていこうとする社会変革的な方向性」があり、SHGとは、以上のような「相反する思想の混在の中にある」としている。

１．１．２　欧米における SHG の歴史と展開

岡(2000: 718)は、「最初にセルフヘルプグループの「力」を世に示したのはアルコール依存症者たち」であり、1935年に２名のアルコール依存症者によって結成されたAlcoholics Anonymous(以下、AA と表記)は、セルフヘルプ活動によって、「医療専門職がなしえなかった」アルコール依存症からの「回復」を実現したとしている。また、三島(1997: 84)も、欧米において「1930 年代以降、Alcoholics Anonymous(AA)を始めとして数多くの SHGs が、それぞれ組織され始めた」としており、AAをSHGの１つの源流とみている。

三島(1997:84)は、欧米の先行研究を踏まえ、「30年代から50年代は、グループ内での話し合いの中から、問題解決を図っていくという、SHGsの基本的方法が確立され、この方法を使ったグループが、発展していった時期であると言える」としている。

久保(1998: 4)は、「1950年代後半から1960年代にかけて、とくに多くのセルフヘルプ・グループが設立された」としている。その背景は、1960年代という時代が、「いろいろな意味で市民運動が発展した時期」(岡 1990b: 50)であったことに求められている。当時、SHGはそれらに触発される形で、「それまで持ち得なかった社会批判・社会変革の精神を新たに吹き込まれ」(三島 1997: 84)ていったとされている。

岡 (1990b: 52)は、以上見てきたような欧米のSHGの展開を以下のようにまとめている。

> AAが活動を始めた1930年代以降は、治療的なセルフヘルプグループが大勢を占めており、そこではスマイルズ的な自助の精神が強い思想的背景としてあった。ところが1960年代の市民運動の台頭の時代にはいって、セルフヘルプグループは社会変革の志向のより強いものが続々と生まれていく。スマイルズ的な自助に加えて、クロポトキン的な社会変革的相互扶助の考え方が強くなるわけである。

つまり、1930 年代の AA という SHG の「成功」を通して、当事者の持つ「力」が社会的に認知され、まず、SHG が持つ「治療的機能」(岡 1985)が積極的な評価を受けた。だが、1960 年代の市民運動の盛り上がりに伴い、SHG にも社会批判・社会変革の精神が芽生え、その「社会的機能」(岡 1985)の重要性が強く認識されるようになっていったということだ。

岡(2000: 718)は、「1970 年代に入ると、いくつかの国では、その運動は大衆運動から小グループの運動へと移行」したとしている。岡(1990a: 19)はこのような、SHG における「問題の個別化・特殊化」は「セルフヘルプグループ運動に特有」のものであるとしている。

１．２　SHG という援助形態

１．２．１　SHG の特徴

SHG の定義には様々ある。先行研究では、その論者の立場によって適宜、「社会的機能」に重きを置いた定義が採用されたり、「治療的機能」に重きを置いた定義が採用されたりしてきたのが実態と言える。SHG の２つの機能についてバランスよく触れた定義として有名なものには、Katz & Bender(1976)による定義がある。参考として、その全文を以下に記す。

> セルフ・ヘルプ・グループは、自発的に結成された相互援助と特定の目的の達成をねらった小グループである。メンバーは通常、相互援助のために集まり、メンバーのもつ共通のハンディキャップとか生活を苦しくさせている問題とかに取り組み、望ましい人格ないし社会変化をひき起こそうとする。提唱者やグループ・メンバーは、既存の社会施設や組織では要求が満たされていないか、その可能性がないと考えている。セルフ・ヘルプ・グループは、顔をつき合わせてのつき合いを強調し、メンバーの個人的責任を強調している。精神的支えばかりでなく、物質的な援助もなされることが多く、メンバーの個人的同一性を高めるような価値観なり、イデオロギーを啓蒙し普及しようとしている[1]。

SHG の機能には様々な言及がなされているが、特に次の３つを挙げられるだろう。それは、①「ヘルパー・セラピー原則(the helper therapy principle)」、②「体験的知識(experiential knowledge)」、③「プロシューマーモデル」である。以下で、それぞれ具体的にどのような概念なのか確認していく。

①ヘルパー・セラピー原則

久保(1981: 254)は、Riessman(1965)が提唱した「ヘルパー・セラピー原則」とは、端的に、「援助をする人がもっとも援助(利益)を受ける」という概念だとしている。たとえば、「従来の援助者―被援助者の関係では SHG のメンバーはつねに被援助者」となっていたが、「SHG の中ではメンバーは両者の役割、ときには援助者の役割をより多く持つことになる」。つまり、今までは被援助的な役割を担うばかりであった「自分が援助的な役割を担うことによって新しい経験を獲得し、それが「力」となる」のだと解説している。

②体験的知識

三島(1998: 43)は、Borkman(1976)が提唱した「体験的知識」という概念によって、「セルフヘルプ・グループの援助は、専門的知識との比較において、独自の正当な重みをもつ位置を占めるに至った」としている。三島(1998: 43-44)は、「体験的知識」のことを「ある体験に見舞われ、身体・精神を含めてその人の全体が巻き込まれ、しかも、その体験を生

[1] 訳は、村山(1979)を参考とした。

き抜く過程を通じて獲得される」、「体験そのものから生じる、体験それ自体への、独自の問題解決や技能」のことだと説明している。

また、三島(1998)は、「体験的知識」の特性として、①実用的・実践的であること。②「今ここで(here and now)」の方向性。③全体的・包括的(holistic and total)の３つを挙げている。この概念の導入以後、SHG は、「組織化された体験的知識をもつことで、より一層機能する集団になる」(三島 1998: 44)と考えられるようになった。

③プロシューマーモデル

岩田(2008)は、「プロシューマー」とは、「プロデューサー(援助の生産者)」の「プロ」と、「コンシューマー(援助の消費者)」の「シューマー」を合体させた概念であるとしている。つまり、「プロシューマーモデル」とは、SHG に所属する「プロシューマー」たるメンバーは、「仲間から援助を受ける「援助の受け手」であるとともに、仲間を援助する「援助の与え手」」(岩田 2008: 43)でもあるのだということを示した概念なのだ。

「プロシューマーモデル」は、消費者運動の影響を受けて成立した概念として知られている。三島(1998: 43)は、Riessman(1990)を参照し、その本質を以下のように解説している。「援助を与える目標とされる人々自身を、積極的な援助資源として位置づけ」直し、「援助の与え手が援助することを通じて、大いに援助されるというヘルパー・セラピー原則を利用することで、援助の受け手を援助の与え手(担い手)に移し、問題をもつことを解決の一部としてしまう」。それによって、「援助の人的資源を拡張しよう」というのが、「プロシューマーモデル」が見据える射程であり、本質なのだと言える。

ここまで、先行研究における SHG の定義と機能を概観してきた。以下で、先行研究を踏まえた本論における SHG 概念を定義する。

本論は、SHG としてのひきこもりサミットの「運営の困難さ」について扱うものである。したがって、本論では、筆者が「運営の困難さ」を感じていた当時の SHG としてのひきこもりサミットが重視していた「治療的機能」に重きを置いた定義を特に採用することとしたい。具体的には、高松(1989: 320)による、SHG とは、「共通の問題を持つ人たちによる、相互援助のためのグループ」のことを指す、という定義を採用することとする。これで、本論における SHG 概念の定義づけという本章の目的の１つが達成された。

次項で、日本の SHG 研究の歴史の中に、本論が扱うひきこもりサミットの「運営の困難さ」の「当事者研究」という実践を位置づける。

１．２．２　日本における SHG の歴史と展開

1980 年代[2]、日本で SHG 研究がはじまった頃、多くの専門家たちは、「SHG の援助の有効性についてはまだまだ批判的」(中田 2003: 75)であった。その一方で、久保(1981: 254)は、「SHG の有効性に関する科学的な研究は、まだ充分なされているとはいえない」が、「専門家たちは、SHG を単に非専門的ないし「しろうと的」な援助形態と見ることはしなくなり、SHG のもつ「援助的な力」を、積極的に評価」するようになったとしている。

1990 年代になると、「日本でも専門職側が SHG にどうかかわるかという問題系がクローズアップ」(中田 2012: 273)されるようになったとされている。そこでは、「専門職者が SHG の自律性(autonomy)を損なうことなく、いかにして SHG に関わればよいのか」(松田 1994:

[2] 岡(2000)は、日本に SHG 概念を最初に紹介したのは、村山正治・上里一郎編著, 1979,『セルフ・ヘルプ・カウンセリング』福村出版だとしている。

353)が問題となっていた。このような問題について、岩間(1998: 289)は、専門家が SHG との「距離のとり方に気を配れば」、専門家と SHG とは、「異質なサービスを提供し合う」者として、「相互に利益をもたらす形で関係を成熟させる可能性を秘めて」いるのであり、専門家は、「どうしたら両者の関係に潜む危険性を避けて相互に利益の多い豊かな協働関係を築いて行けるのか、その方法を模索し続けていくべきである」と結論づけている。

1990 年代はまた、日本で SHG 概念の整理が進んだ時代でもある。1990 年、岡は、「セルフヘルプグループの概念をめぐって」という論文で、SHG 概念の整理を行った。1994 年にも岡は、欧米の先行研究や日本の歴史や文化の検討を踏まえ、以下の３つの要素を SHG の本質とした。それが、「わかちあい」「ときはなち」「ひとりだち」の３つの概念である。この際、岡(1994: 65)は、「セルフヘルプグループは、問題解決のための一つの社会的方法」としており、これらの研究から、「セルフヘルプ-グループ運動を理解する道筋として、セルフヘルプ-グループには「わかちあい、ひとりだち、ときはなち」というプロセスを経て、社会改革という視点の運動に至るという流れ」(半澤 2001: 199)が示された。以降、日本の SHG 研究において岡が提唱したこの３つの概念は度々、引用されることとなる。

ここで一度、ここまで見てきた日本の SHG 研究の流れを確認する。1980 年代、日本の SHG 研究では、まず、SHG が持つ「援助的な力」に注目が集まっていた。そして、1990 年代には、SHG の概念整理が進み、SHG が持つ「社会的機能」の重要性が確認され、高い潜在能力を持つ SHG と専門家とがよりよい関係を築いて行くことの重要性が説かれた。

2000 年代の SHG 研究では、まず、SHG という―当事者の「回復」のための高い「治療的機能」と、専門家主導の治療のあり方や社会のあり方そのものを変えていくような「力」、すなわち高い「社会的機能」を持つとされる―社会資源[3]に対する社会的期待が盛んに説かれるようになる[4]。しかし、そのような社会的期待の高まりの一方で、現場の SHG では、さまざまな課題が浮上しているという報告がなされたという風にまとめることができる。

SHG に対する社会的期待が高まる中、中田(2003: 75)は、「SHG の中には、深刻な運営上の課題を抱えている場合もあるなど、必ずしも常に有効な援助形態とはいえない」と釘を刺した。中田(2003)は、具体的な SHG 運営上の課題として、「予算・費用」に関する問題、「メンバーの募集やその定着」に関する問題、「ミーティング運営」に関する問題、「会報・プログラム」に関する問題、「マスコミ・行政・情報機関」に関する問題、「世話人のリーダーシップ」に関する問題の６点を挙げており、特に SHG 運営に困難を覚えやすく、バーンアウトが懸念されるリーダーを支援することの重要性を説いた。

また、岡(2002)は、現状、SHG の参加者は熱心なリーダーと受動的な会員の二極化状態にあり、自分たちのニーズを充足することを求めて SHG に入るフリーライダー的な参加者のために、SHG 運営におけるリーダーたちの負担がとても大きくなっていると指摘した。

SHG の運営者の負担について扱う研究は、2010 年代にもみられる。たとえば、三好(2014a: 701)は、運営者へのインタビュー調査を踏まえ、従来、「当事者の主体性を重んじ

---

[3] SHG を社会資源とみなすような記述が見受けられる資料としては、2002 年 5 月発刊の『生活教育』46 号 5 巻を特に挙げられる。そこでは、「社会資源としてのセルフヘルプ・グループ―地域保健福祉活動にどう活用していくか」というタイトルで特集が組まれており、SHG という社会資源をいかに地域保健や福祉に活用していくのが望ましいのか、また、その際、専門家はどのように彼らと関わるべきかなどといったテーマについて考察がなされている。

[4] 中田(2003: 75)は、SHG に対する社会的期待の高まりの結果、2000 年代には「SHG はあたかも万能薬であるかのようにその援助特性や機能が語られる場合さえある」としている。

てきたSHGは現在、専門家と当事者が「協働」する在り方を模索する段階にあるのではないだろうか」と、SHGにおける専門家と当事者のより緊密な協働の必要性を説いている。

2000年代以降、日本のSHG研究で、運営者の負担に関する研究がなされてきたことを確認した。筆者が運営していたひきこもりサミットというSHGにおける「運営の困難さ」の「当事者研究」を扱う本論は、以上で確認したような「SHG運営の困難さ」(中田 2003: 82)を扱うSHG研究の１つとして位置づけることができるだろう。本研究の新しさと意義は、「運営の困難さ」の解決方法をひきこもりサミットの当事者で導き出す点にあると言える。つまり、本論は、従来、専門家主導でなされてきたSHG研究に当事者も参画し、当事者発信の「SHG運営の困難さ」の解決方法を明らかにすることを狙う「研究」なのである。

本研究が採用する、当事者が「研究」という空間に参画することを可能にする「当事者研究」とはどのような営みなのか、次章で詳述する。

２.「当事者研究」について

本章では、まず、１節で浦河べてるの家で「当事者研究」が誕生した背景を確認し、２節１項で「当事者研究」の特徴を概観したうえで、２節２項で本論が「当事者研究」という研究方法を採用する理由を明らかにする。次に、３節で、浦河べてるの家の「当事者研究」の手順を参考にして、ひきこもりサミットの「当事者研究」の手順を作成する。

２．１　「当事者研究」とは

２．１．１　「当事者研究」のはじまり

「当事者研究」は、2001年、北海道の浦河べてるの家ではじまった。べてるの家で生まれた「当事者研究」は、今では日本各地に広まり、韓国など国際的な広がりも見せている。

べてるの家のソーシャルワーカーである向谷地(2005: 3)によれば、そのはじまりは、統合失調症を患い、“爆発”を繰り返し、当時入院中だった河崎寛に対して、向谷地が「一緒に“河崎寛”とのつきあい方と“爆発”の研究をしないか」と誘ったことに求められる。

河崎(2005: 180-185)は、「当事者研究」をはじめるまで、どうしても自分の中に生じてしまう「暴力の衝動」に自分自身が振り回され、苦しんできたという。当時、河崎は入院中に、電話口で自分の要求の通りに動かない親に苛立ち、「暴力の衝動」に駆られ、病院内の公衆電話を壊してしまう。向谷地(2005: 184-185)は、そのような事態を受け、いつも河崎の問題行動に振り回され、「尻拭い」をし続けてきた親御さん―特に父親―は、「電話の向こうでうなだれているというか、崩れかかっている感じ」がし、なにより、問題行動を引き起こした河崎自身、「首が折れそうにうなだれていました」としている。

そんな本人や向谷地を含む周囲の者が皆、どうにも行き詰まったところで、向谷地は、河崎を「研究」に誘った。向谷地(2006a: 64)は、「当事者研究」とは、「このような一番困難な現実からスタートした」のだとしている。河崎(2005: 185)は、向谷地に「研究」に誘われた当時の心境を、「訳わからなかったけれども、妙にワクワクしたんだ」と述べている。

石原(2013: 15)が指摘するように、あるいは、「当事者研究の魅力の一端は、「研究」という言葉そのものにある」のではないだろうか。すなわち、「当事者研究」とは、向谷地(2005:

3)が言及しているように、「自分を見つめるとか、反省するとか」ではなく、自分のことを「研究」するということが、人を「なにかワクワクする感じ」にさせ、どこか「冒険心をくすぐられる」、そんな魅力的な営みなのではないかと思われる。

２．１．２　べてるの家における「当事者研究」成立の背景

「当事者研究」の理論化を積極的に推進している熊谷は、べてるの家で「当事者研究」が成立した背景について、國分との対談の中で以下のように述べている。

> 当事者研究が生まれた背景をたどると、能動／受動図式の当事者運動・当事者主権的なムーブメントと、中動態的な依存症自助グループの実践とが、化学反応を起こして誕生したとも読み解けるように私は考えています。しかし、この２つはある意味ではとても相性が悪い。　(熊谷＋國分 2017: 18)

ここで言われている、「当事者運動・当事者主権的なムーブメント」とは、日本の重度身体障害者による自立生活運動のことを指している。一方の「依存症自助グループ」というのは、アルコール依存症者による SHG である AA のことを指している。熊谷は、この２つの当事者活動は「とても相性が悪い」としている。それはなぜだろうか。

> たとえば当事者が決めたことを絶対視する当事者主権を徹底すれば、「薬を使いたい」という薬物依存当事者の希望も認めることになります。ところが依存症自助グループのリカバリー概念は、本人の意志を過信しないところからスタートしていて、その点で、字義通りに解釈したら当事者主権と鋭く対立します。　(熊谷＋國分 2017: 18)

つまり、熊谷(2017: 18-19)によれば、当事者主権の考え方においては、当事者の自己決定が最大限尊重され、それに対するどんな「内政干渉」も極端に厭われる傾向が認められる。それに対して、依存症自助グループでは、その 12 ステップの「最初に自己コントロールを放棄するところから始めよ」とあるように、まず、「自己統治の断念」からリカバリーのステップが始まるという風に考えられており、本人の意志決定に対する考え方はまったく異なっており、両者はおよそ相容れないものであるということになる。

しかし、熊谷(2017: 18)は、北海道の浦河のべてるの家という地で、それにもかかわらず、「当事者主権と依存症自助グループという、交わらないはずの２つが化学反応をおこして「当事者研究」は生まれてきた」としている[5]。

２．２　「当事者研究」という方法

２．２．１　「当事者研究」の特徴

「当事者研究」の最たる特徴は、「障害や問題を抱える当事者自身が自らの問題に向き合い、仲間と共に、「研究」すること」(石原 2013: 12)にある。その成立背景からわかるように、「当事者研究は、ピアサポートの理念や当事者運動の思想、認知行動療法と SST、フラ

[5] 浦河べてるの家で「当事者研究」が誕生した「歴史的諸条件」(熊谷＋國分 2017: 19)として、先行研究では他に２つの要素が挙げられている。１つ目は、SST(社会生活技能訓練)(石原 2013: 28-30)であり、２つ目は、フランクルの「実存分析」(石原 2013: 32-34)である。

ンクルの実存分析の思想を背景としながらも、それらとは異なる特徴を持つものである」(石原 2013: 35-36)。たとえば、「当事者研究」には、「さまざまなアプローチや技法を取り入れながらも、それらの意味を根本的にずらしていく」(石原 2013: 23)という特徴がある。

石原(2013: 21-22)は、「「研究」とはそもそも共同的な行為」であり、自らのことを語ることを封じられてきた当事者は「当事者研究」の実践によって、「「自分を語る」際のリスクと負担が軽減されることになる」としている。なぜなら、「研究の空間はそもそも、語り手の安全性を確保するという機能を持っている」からであり、「当事者研究」を実践する当事者の自分語りは、「単に「自分を語る」のではなく、「研究」として進めることによって、それは個人的な行為ではなく、社会的に有意義な共同行為であることになる」からである。

２．２．２　なぜ「当事者研究」なのか

本論が、数あるアプローチの中から「当事者研究」を採用する理由としては、まず、今まで蓄積されてきたSHG研究の中に、当事者であるSHGのメンバーや運営者によってなされた「研究」がほとんどないことが挙げられる。半澤(2001)の調査から、1957年から1999年にわたって著されたSHGに関する文献を「社会福祉」、「看護・保健」、「医学」、「当事者」の４つに分類した場合、当事者による文献は全体の10%に満たないことがわかっている。

このようなデータからも、SHGという概念が形成される議論の過程において、現にSHGに所属する当事者たちはその周縁に位置づけられ[6]、議論の場に参画することがないまま専門家によって一方的にその概念や機能の定義がなされてきた可能性が極めて高いと言える[7]。

あるいは、SHGという概念は、専門家の興味・関心に基づいて一方的に定義されてきた概念に過ぎないのではないだろうか。つまり、SHGとは、専門家という「語ることのできる主体」(野崎 2011: 166)によってなされてきた定義の変遷そのものであり、SHG で活動する当事者は「語りえない他者」(野崎 2011: 166)として、一方的に規定され続けてきた「もの言わぬ他者」(Said 1993=1978)に過ぎなかったのではないか。然るに、SHGという概念は、実はそれ自体が、専門家―当事者間の権力差を表現した概念なのではないだろうか。

もっとも、「当事者研究」には、以下のような批判もある。すなわち、「当事者研究は素人による非科学的な営みに過ぎず、その効果は疑わしい」(石原 2013: 55)というものだ。

しかし、「当事者研究」に対するこのような批判はあまり意味をなさない。なぜなら、つまるところ「当事者研究」とは、「病気に関する語り、研究する権利を専門家の手から取り戻そうとする」(石原 2013: 58)実践なのであって、その効果や科学的な営みであるかどうかは、本来的に重要ではないからである。石原(2013: 21)が指摘しているように、「当事者研究は「研究」が持つ公共性空間への経路を当事者がうまく利用」したアプローチなのであり、「研究者のみが精神障害者の語りを公の場で語ることができるのであれば、当事者自身が研究者になってしまえばいいのだ」という逆転の発想を可能にする方法なのである。

つまり、「当事者研究」とは、石原(2013: 21)が述べるように、「当事者が研究者になるというこの逆転現象によって、公的な場に現れる研究者と隠匿される当事者という構図」を破壊し、公共性空間の中に自分のことを語る場をとり戻すことを通じて、社会的に孤立し

---

[6] 岩田(2008: 16)は、SHGの「運営の主人公」は「メンバー」であるとしているが、「メンバー」であるところの当事者は、SHG研究の「主人公」になることはできないのだろうか。

[7] 中田(2012: 270)は、「SHGの言説史はほとんど、専門家の議論によって構築されてきたといっても過言ではない」としている。

がちであった当事者に「つながりの回復」をもたらす契機となりうる営みなのである。このような特徴を持つ「当事者研究」を、本論では、特に採用したいと思う。

２．３　ひきこもりサミットの「当事者研究」の手順

向谷地(2005)が整理した、べてるの家の「当事者研究」の手順を参考として、ひきこもりサミットの「当事者研究」の手順を作成すると以下のようになった。

①筆者が感じていた「運営の困難さ」と筆者自身との切り離し作業を通じて、「運営の困難さを感じている自分」と「運営の困難さについて考える自分」とを併存させる。これが、筆者が感じていた「運営の困難さ」をグループ全体の〈問題〉として、立ち上げメンバー全員で向き合う際の重要な“構え”となる。②立ち上げメンバー達と共に、当初の目的とは異なり、相互援助のための SHG の運営を担うことになっていった筆者の苦労を共有し、その過程や規則性・構造を明らかにしていく。そして、ひきこもりサミットで起きた〈問題〉が示唆する「可能性」や、ひきこもりサミットにおいて「運営の困難さ」が生じたことの「意味」を共有する。③ひきこもりサミットの運営において苦労をした筆者は、今後はグループ運営における自分の助け方や守り方の具体的な方法を考え、そのアイデアを立ち上げメンバー達と共有する。④本研究を卒業論文として世の中に著し、「当事者研究」という方法が、運営に困難を抱える他の当事者グループにおいても有効な解決方法となりうることを明らかにする。そのような形で、ひきこもりサミットの「当事者研究」の成果を「一つの「例示」」(石原 2013: 63)としてデータベース化する。

これで、本論が「当事者研究」を採用する理由と、ひきこもりサミットの「当事者研究」の手順を明らかにするという、本章における２つの目的は達成された。以上で明らかになったひきこもりサミットの「当事者研究」の手順(以下、「手順」と表記)を用いて、３章で、ひきこもりサミットの「当事者研究」を行う。

３．ひきこもりサミットの「当事者研究」

本章では、ひきこもりサミットの「当事者研究」を行い、「運営の困難さ」の解決方法を明らかにする。向谷地(2005: 293)は、「当事者研究は、参加する一人ひとりの当事者化を促す作用」があるとしている。あるいは、運営者個人の問題とされがちな「SHG 運営の困難さ」は、グループで「当事者研究」を行うことで、「グループの問題」として立ち上げられるのではないか。筆者は、「運営の困難さ」とは、運営者以外のグループのメンバーもその当事者となることで初めて解決するものだと考える。すなわち、「当事者研究」の、参加者を当事者化するという特徴こそ、本論が「当事者研究」を採用する最大の理由なのである。

３．１　ひきこもりサミットと「運営の困難さ」

本論がひきこもりサミットを研究対象とする理由は、筆者がひきこもりサミットの「運営の困難さ」を抱えていく中で深めていったグループにおける“孤立感”の解決方法を、「運営の困難さ」の解決方法と一緒に究明したかったからである。本節では、１項で、ひきこ

もりサミットというグループについて、特にグループ名の由来に関する説明を行う。続く２項で、筆者が感じていた「運営の困難さ」について川田(2017)のレポートを基に説明する。

３．１．１　ひきこもりサミットとは

ひきこもりサミットとは、筆者がひきこもり経験を持つ友人と音信不通になった際、その友人に対して、「今度、不登校やひきこもりなんかの経験のある友達連中で集まるけど、よかったら一緒にどう？」と誘ったことをきっかけに始まったグループのことである。

グループ名が「ひきこもりサミット」となった背景にはいろいろあるが、「ひきこもり」と「サミット」という字面のアンバランスさを、ひきこもりサミットの立ち上げメンバーである４名全員が「おもしろい！」と感じたことが大きなポイントだと言える。綾屋(2017)は、ユーモアやメタファーとは、多数派による既存の固定観念や価値観を把握したうえで、それとは異なる観念や価値観を共有する者同士が、既存の言葉づかいとは少しずらした表現をすることで生じる、人間関係のつながりを担保にした理解やおかしさだと言えるのではないかとしている。立ち上げメンバー達が「ひきこもりサミット」というグループ名を「おもしろい！」と感じた背景には、綾屋が述べるユーモアの存在があるように思われる。

つまり、立ち上げメンバーの中には、既存の固定観念や価値観を把握したうえで、それとは異なる観念や価値観を共有する者同士というつながりの担保があったからこそ、軽いノリで深い考えもなく、「ひきこもりサミット」というグループ名が採用されたのである。

当初、ひきこもりサミットは、「自らの経験を踏まえ、毎回のテーマについて各々の立場から意見を述べ、自分たちの経験を多面的に捉えなおし、そこで得られた知識を社会に還元する」ことを目的としたグループであった[8]。月に１回位の頻度で喫茶店や、運営者宅に集まり、テーマを決めて集まっていた。そんなひきこもりサミットにおいて、様々な要因からグループ運営を積極的に担っていた筆者は、次第に「SHG を運営していく上での困難さ」(中田 2003: 82)に直面していった。

３．１．２　ひきこもりサミットの「運営の困難さ」

川田(2017)は、ひきこもりサミットの「運営の困難さ」が生じた要因として以下の４点を挙げている。①グループが持つ「場の力」に対する過信、②グループ名が持つ「逆機能」[9]、③居場所機能の特化という「組織化」、④運営者が筆者１人しかいなかったこと。

これらの要因は、以下のようにまとめることができる。まず、「場の力」に対する過信のために、立ち上げメンバーは、しんどい状態にある人でも特に考えもなくグループに受け入れていった。それに伴い、「ひきこもりサミット」というグループ名のユーモアを共有しないメンバーが増え、ひきこもりサミットをひきこもりの人のための SHG と誤解するメンバーが増加したのである。そのようなグループの変質から、運営者であった筆者も知らず

---

[8] もっともこのようなグループの目的は当初から明示されていたものではなく、川田(2017)の「研究」を通して、F さんと筆者によって改めて作成されたものであることを断っておく。

[9] 佐藤(2011: 237)は、マートンが示した「機能と逆機能とは、文字通りにいうと、ある原因がもたらす結果はシステムという全体を存続させる方向のものと、存続させない方向のものと、二種類に分けられるという考え方」だとしている。すなわち、ひきこもりサミットのグループ名が持つ「逆機能」とは、当初は、ユーモアを共有する者同士で組織されたグループであることを示していた「ひきこもりサミット」というグループ名が、結果的にグループに「運営の困難さ」をもたらすものとして機能してしまったということを意味する。

知らずのうちに声の大きいしんどい状態の人のニーズに応える形で、居場所機能の特化に向けた「組織化」を推進していった。この「組織化」によって、ひきこもりサミットは本格的に「SHG 化」し、SHG 運営に奔走する筆者は次第に疲弊していった。このような経緯を経て、筆者はグループの中心にいながらにしてグループ内で“孤立感”を深めていったのである。これで、ひきこもりサミットの「運営の困難さ」の概要は明らかにされた。

次節では、本研究における「当事者研究」の方法論を確認する。

３．２　本研究における「当事者研究」の方法論

本研究の目的は２つある。１つ目は、上記で確認したひきこもりサミットという SHG において生じた「運営の困難さ」の解決方法を明らかにすることだ。２つ目は、ひきこもりサミットの運営者を務めていた筆者が「運営の困難さ」を抱え込んでいき、グループ内で深めていった“孤立感”を解決することである。本研究は、ひきこもりサミットの「当事者研究」の実践を通じて、２つの目的を同時に達成することを狙う「研究」なのである。

本研究では、調査方法としてフォーカス・グループ・ディスカッション(以下、FGD と表記)を採用する。FGD とは、「あらかじめ選定された研究関心のテーマについて焦点が定まった議論をしてもらう目的のために、明確に定義された母集団から少人数の対象者を集めて行うディスカッション」(千年・阿部 2000:57-58)のことである。

本研究の調査対象者は筆者を含むひきこもりサミットの立ち上げメンバー４名とする[10]。「SHG 化」したひきこもりサミットというグループの問題について「研究」するならば、グループの事情に明るいメンバーだけで行うのが理に適っていると思われるからだ。FGD では、本来、「モデレーターと呼ばれる進行役がディスカッションをリードする」(千年・阿部 2000: 58)ことになっている。しかし、本研究ではモデレーターは採用しない。筆者をファシリテーターとして、筆者を含む立ち上げメンバー４名のみで FGD を行うこととする。

一回目の FGD の質問項目は以下の３点であった[11]。①ひきこもりサミットにおける「運営の困難さ」はどんなものだったと思うか。②筆者が「運営の困難さ」に直面していた当時のひきこもりサミットの雰囲気についてどのように感じていたか。③ひきこもりサミットの「運営の困難さ」をグループとして解決するには、具体的にどうすればいいと思うか。

以上のような質問項目に基づいて一回目の FGD が行われると、「元々、私はこのひきこもりサミットを SHG だとは思っていない」(F さん)という発言に見られるように、立ち上げメンバー４名が行う活動を従来の SHG と同列に語ることに対する強い違和感が示された。

そこで、二回目の FGD では、ひきこもりサミットと従来の SHG の特徴を比較することを通して、「わたしたちのグループ」である、ひきこもりサミットのグループ像を浮き彫りにすることを狙った。二回目の FGD における質問項目は以下の２点だ。①従来言われてきた SHG とひきこもりサミットとの違いはなんだと思うか。②今後、対外的にひきこもりサミットのことを説明するとしたら、どのようなグループであると説明すればいいと思うか。

以上、本研究における「当事者研究」の方法論の確認ができた。次節では、本節で明らかにした方法論を用いて、「当事者研究」を実践した様子を確認する。

---

[10] 本研究の調査対象者のプロフィールについては、「表３－１」で示した通りである。
[11] 一回目の FGD では、調査対象者は事前に川田(2017)のレポートを通読してきていた。

３．３　「当事者研究」の実践

本節では、FGD を行った際の概要を示す。また、「当事者研究」の実践に際し、筆者は「手順」①を意識していたことを確認しておく。一回目の FGD は、2017 年 7 月 15 日に約 90 分間行った。一回目のひきこもりサミットの「当事者研究」では、以下の３点がわかった。

①ひきこもりサミットの「運営の困難さ」は筆者個人の問題という見方

FGD の冒頭、T さんは、筆者がひきこもりサミットの「SHG 化」を推進していた当時のことを、「あ、こういう風になっていくんだな～と、ちょっと離れたところから見て」いたので、ひきこもりサミットの「運営の困難さ」について話し合うとしても、「あんまりその、当事者としての意見というよりは、(中略)、ちょっと外側から見てる感じの意見になっちゃう」と思うと述べていた。このような感覚は T さん、F さん、C さんという筆者以外の立ち上げメンバー「３人に共通している」(F さん)ものであったことがわかっている。

つまり、ひきこもりサミットの「当事者研究」の冒頭、筆者以外の立ち上げメンバー達は、「運営の困難さ」という問題を基本的に筆者個人が抱える問題と捉え、「グループの問題」と捉えていなかったのだ。この際、「運営の困難さ」について、「ちょっと外側から見てる感じの意見」を述べていくメンバーの姿を見て、グループで“孤立感”を深めていた筆者はますます自分とメンバーとの隔たりを覚え、いたたまれなくなったと記憶している。

しかし、このような運営者としての筆者が抱えていた「運営の困難さ」を遠巻きに眺める３人の姿勢は、次に見る C さんの発言を機に大きく変わり、筆者が１人で抱え込んでいた「運営の困難さ」という問題は、「グループの問題」として立ち上がっていくこととなる。

②「運営の困難さ」が「グループの問題」として立ち上がるとき

C さんは、川田(2017)のレポートを読んで、「あ、ツラかったんだな～」と感じたと述べている。これに対し F さんも「そうそう、そうそうそうそう」と強い同意を示し、次の瞬間、誰からともなくメンバー３人から暖かい笑い声が同時にあがった。筆者が「運営の困難さ」に陥っていった様子を最も近くで見ていた C さんは、当時の筆者やひきこもりサミットの運営のあり方の様子を以下のようにふりかえっている。

> なんか途中からきっとツラいんだろうなっていうのは、薄々感じてたんだけど、あ、こういう風にちゃんとふり返ってみると、あ、本当にツラかったのかなっていうのが、ね。(中略)１人で何かを運営するってなったら、(中略)その１人が全部こう、運営するってなっちゃった場合、その人がいなかった時に、やっぱりそのグループは成り立たないっていう感じになるのかなって思って。

C さんの発言を機に、メンバー達は、筆者１人に依存していたかつてのひきこもりサミットの運営体制のあり方や筆者が「運営の困難さ」を抱え込んでいった経緯を反省的に捉え返していく。すなわち、ひきこもりサミットは当初、「自然発生的に出てきたもの」(T さん)であるがゆえに、グループとしての目的を「明確にすることができないところから始まっているから、結局やそら君(筆者のこと)頼みみたいになっちゃっていたのがツラ、ツラかったのかな、ツラかったというか、ツラくさせちゃってた」[12] (C さん※強調は引用者による)という認識が、C さんの発言をきっかけとして、メンバー全員に共有されたのである。

---

[12] これで「手順」②で確認した、ひきこもりサミットというグループ内において「運営の困難さ」という〈問題〉が生じた過程や規則性・構造は明らかにされたと言えるだろう。

言い換えると、当初は、「運営の困難さ」を筆者個人の問題と捉え、「ちょっと外側から見てる感じの意見」しかできないと言っていたメンバー達が、「運営の困難さ」という問題を抱え込み、グループにおいて“孤立感”を深めていた筆者に対する C さんの共感的な発言を機に、今までのグループに対する自らのかかわり方を反省的に捉え返していったということだ。このような段階を経て、メンバー達は、「運営の困難さ」という問題を「グループの問題」として捉え直し、各人がそれぞれに引き受け直していったと言える[13]。

一連の場面は、まさしく、「当事者研究」の実践を通して、その参加者の当事者化がなされた瞬間だと言える。また、筆者が抱えていた「運営の困難さ」に対する共感がメンバー達から示され、各人がひきこもりサミットの「運営の困難さ」という問題を当事者として引き受け直してくれていったことで、筆者の“孤立感”はなくなり、解決されたと言える。

③「運営の困難さ」の解決方法

「運営の困難さ」の解決につながるアイデアとしては、「変に組織化しないこと」(F さん)や「ケアの安売りはしないって決めたんです」(筆者)の２つを挙げることができる。これらのアイデアに関しては、次節で詳述することとする。

二回目の FGD は、2017 年 8 月 27 日に約 60 分にわたって行われた。二回目のひきこもりサミットの「当事者研究」では、以下の２点がわかった。

①ひきこもりサミットは“素朴な感情”を大事にするグループ

T さんは、SHG と４人で活動するひきこもりサミットとの違いについて以下のように述べている。それによると、SHG とは、「援助とか治療とかを目的として意図的に作られたもの」だが、ひきこもりサミットは、「自分たちが「行きたいな」っていう、なんか自主的な気もちで集まってる」ところに違いがあるという。

つまり、４人で活動していくひきこもりサミットは、「「気が合いそう」とか、「また会いたい」」(F さん)といったメンバー同士がお互いに感じている“素朴な感情”に基づいて活動を続けていくグループなのであり、そこには、相互援助を目的とする SHG とは異なり援助や治療といった意図は何もないということである。

②ひきこもりサミットの活動の軸は“ワクワク感”

F さんは、ひきこもりサミットが行っている活動は以下のようなものだとしている。

> (メンバー間に)利害関係がなくて、なにかしっかりとゴールが定まっているというわけではなくて、この場に集まって、自分が今思っていることとかっていうのをある程度、あの正直に、あの建設的に話をしていくって、そういう風に何が出来るのかを決めずに見ていく(グループ)。

つまり、ひきこもりサミットとは、グループとして目指すゴールは明確に定まっていないが、お互いの関係を搾取することなく、その時々のテーマに沿って率直に建設的な話し合いをしていけば、なにかしらの「化学反応」(C さん)が起こるだろうとメンバー全員が「期待して来ているところ」(C さん)だと言える。言い換えれば、ひきこもりサミットとは、そのような「ワクワク感」(C さん)をモチベーションとして、「その時その時で興味あることを持ち寄って、どうお互いが思うのかを話してる」(F さん)グループなのである。

---

[13] これによって「手順」②で確認した、「運営の困難さ」に陥っていた筆者の苦労は立ち上げメンバーに達に共有されたと言えるだろう。

３．４　「運営の困難さ」に対する処方箋

２回にわたってひきこもりサミットの「当事者研究」を行ってきた。その実践から、ひきこもりサミットの「運営の困難さ」の解決方法として、以下の２点が確認できた。

①「変に組織化」することなく、“素朴な感情”を大事に、活動していくこと

F さんは、ひきこもりサミットの「運営の困難さ」の解決方法として、「変に組織化しないこと～が、大事な気がする」としている。具体的には、役割や日程を「計画的に決める」ことをせずに、各メンバーが持つ「次、また会いたいね～」とか、「次、また今度こういう話したいね～」といった“素朴な感情”をモチベーションとして、グループの活動を無理のない範囲で「ず～っと続けて」行くということだ。

思えば、筆者がひきこもりサミットを相互援助のための SHG として「組織化」していった際、筆者はしんどい状態にある人たちのニーズに引っ張られていく形で、運営者として積極的にケアラー役割を担っていった。当時の筆者は、まさしく、ヘルパー・セラピー原則による「援助者利得の悪魔的な魅力」(稲沢 2002: 490)にとりつかれ、知らず知らずのうちにしんどい状態の人たちと「共依存！」(C さん)状態に陥っていったといえる。

そもそも、筆者が「運営の困難さ」に陥り、ひきこもりサミットが「SHG 化」した背景には、ひきこもりサミットがグループとしての目的を「明確にすることができないところから始まっている」(C さん)ことが挙げられる。そのような反省も踏まえて、C さんは、自分たちがこのグループでしたいことを明確にし、メンバー全員で今後、「わたしたちのグループ」であるひきこもりサミットが、「こうなったらいいよねっていう想いを共有させる」ことこそが、「運営の困難さ」の解決方法につながるのではないかとしている。

そこで、立ち上げメンバー達は、「当事者研究」の実践を通して、今後、ひきこもりサミットは「変に組織化」することなく、“素朴な感情”を大事にするグループとして無理なく活動していけたらいいよねっていう“想い”を共有させたのである。このような“想い”の共有こそが、すなわち、ひきこもりサミットの「運営の困難さ」の解決方法なのである。

②筆者も運営者ではなく、ひとりのメンバーとして活動を楽しむこと

FGD の場で「運営の困難さ」をふりかえっている際、筆者は「ケアの安売りはしないことに決めたんです」と宣言している。この宣言は、かつて、SHG としてのひきこもりサミットの運営において苦労をした筆者が、今後のグループ運営において自分を助け、守る具体的な方法やアイデアを立ち上げメンバー達と共有するという「手順」の③に対応する。

このような宣言を立ち上げメンバー達に対して行うことで、筆者は今後のひきこもりサミットの活動において、自分が安易に運営者やケアラーとなり疲弊することを防ぎ、他のメンバーと同様、“素朴な感情”をモチベーションとしてひきこもりサミットの活動に参加するひとりのメンバーとして、ひきこもりサミットの活動を大いに楽しむつもりでいる。

以上、２点の解決方法の共有と実践により、ひきこもりサミットの「運営の困難さ」は解決される。ひきこもりサミットの「当事者研究」の実践を通して、ひきこもりサミットのグループ運営に対する立ち上げメンバー達の「当事者化」は促され、筆者がしんどい状態の人のニーズに応える形で推進していったひきこもりサミットの「SHG 化」によって陥った“孤立感”も解決された。まさしく、ひきこもりサミットの「当事者研究」の実践によって、ひきこもりサミットは「わたしたちのグループ」としてとり戻されたのである。

４．SHG 論の批判的検討

本章では、まず、「手順」②で確認したひきこもりサミットというグループで起きた〈問題〉が示唆する「可能性」、「運営の困難さ」が生じたことの「意味」を、他の多くの SHG においても「SHG 運営の困難さ」という〈問題〉が生じている社会的状況と関連づけて考察する。次に、「手順」④で確認したように、「当事者研究」という方法が、運営に困難を抱える多くの当事者グループにおいても有効な解決方法となりうることを明らかにし、本研究で得られたひきこもりサミットの「当事者研究」の成果を卒業論文として世の中に著し、これを「一つの「例示」」(石原 2013: 63)としてデータベース化することを目指す。

４．１　「SHG 運営の困難さ」について

本節では、「現在、日本の SHG において、会員数の減少、高齢化によって次世代へのグループの継承に問題を抱えている SHG が多数存在する」(三好 2015: 59)社会的状況を「SHG 運営の困難さ」と捉える。１項で、従来運営者の運営能力の問題(中田 2003)やフリーライダーの問題(岡 2002)として語られてきた「SHG 運営の困難さ」という〈問題〉をマクロな視点から、社会的に構築されたものとして捉え返す。２項で、「SHG 運営の困難さ」という個別のグループで生じている〈問題〉の処方箋として「当事者研究」を提示する。

４．１．１　「SHG 運営の困難さ」の社会的構築

岡(1985)は、「治療的機能」と「社会的機能」の２つの機能を同時に持った「両向性」を有する当事者グループこそが SHG であるとした。これによって、SHG とは、メンバー間の回復機能と、既存の支援や治療システム、社会一般を変革するような機能を発揮するグループのこととされた。また、中田(2015: 62)は、「SHG の範囲をどのように限定するかは、未だ明確ではない」が、プロシューマーモデル的な観点から、「援助の提供者を拡大するという点では SHG の範囲を広く捉える方が援助形態として有効である」としている。

このように専門家は従来、その客観的な視座から SHG の概念規定を行い、一方的にどのような当事者グループが社会資源としての SHG であるかを価値判断し、社会的に有益な援助形態として機能している当事者グループを特に SHG と見なしてきた。このような専門家の言説は枚挙に暇がないが、いずれの言説も当事者の持つ「力」を専門家の考える SHG 概念に沿う形で発揮するように暗に仕向けてきたと言える[14]。言うなれば、SHG と名づけられた当事者グループは、このような SHG の専門家の言説に少なからぬ影響を受け、絡めと

[14] 中田(2015: 65)は、SHG は、「専門職から信頼される SHG を目指す努力をしなければならない」としているが、そもそもなぜ、当事者グループとしての SHG が、わざわざ専門家に信頼されるための努力をしなくてならないのだろうか。また、岡(1990a: 23)は、「差別の糾弾活動を続けながらも地域の協力が得られず孤立化している一部の障害者グループ」を暗に問題視しているが、これは SHG を地域福祉の一翼を担う存在と捉える岡の SHG 観を前提とした視点に過ぎない。むしろこの状況の本質的な問題は、一部の障害当事者が地域社会から孤立することでしか、「自分自身を生きることができない」ことにあるのではないか。専門家は、このような言説や視線を通して SHG に影響を与えて来たと言えるだろう。

られていき、「変に組織化」することを動機づけられていった面があるように思われる[15]。

三好(2015: 52)は、従来専門家は、SHG を「なぜ同じ問題を抱える人々が集うことで回復していくのか」という興味・関心に基づいて「研究」してきたとしている。あるいは、このような問いに基づいて専門家が行ってきた「研究」が生み出してきた SHG に関する言説に多くの当事者グループが絡めとられ、「変に組織化」が進んだ結果、現在、多くの SHG が「SHG 運営の困難さ」という事態に直面しているのではないだろうか。岡(2002)が唱えた SHG の「会員二極化」仮説にしても、SHG の専門家が「研究」において、「実態から得られる概念規定」(岡 1990b: 55)よりも、援助媒介を想定した「モデルとしての概念規定」(岡 1990b: 55)を優先させてきたことを考えれば、自分の利益のみを考え、社会資源たる SHG のサービスを受けるだけの、―専門家がフリーライダーと批判するプロシューマーになりえない―純粋なコンシューマーとしての利用者が現れるのは当然のことである。そのような利用者を SHG の専門家として、問題視し、批判するのは、社会資源や援助形態として SHG を変に理論化してきた専門家によるマッチポンプでしかないのではないだろうか。

以上のような従来の SHG 論は、以下のようにまとめることができる。すなわち、当事者グループのことを「SHG」と名づけた者には、あくまで、当事者グループが「社会資源」として機能していくことに対する期待があるということである。「社会的機能」と「治療的機能」の「両向性」を有する「SHG の像」に合致するふるまいを当然のこととして期待し要求する暗黙の視線、これこそ「SHG」という表現の現実的な意味なのである。援助資源の社会的不足に悩む専門家は、「SHG」を貴重な「回復資源」とみなし、はれものに触るように協働関係を築いてきたと言える。だがそれは、当事者グループが「社会資源」として機能する「十分に発展した SHG」(岡ほか 2011: 169)である限りにおいてだったのである。

だからこそ近年、専門家はその「社会的期待」に応えられなくなってきた「社会資源」として機能しえない、運営に困難を抱える「SHG」を問題視し、その解決方法を「研究」するようになったのである。つまり、「SHG 運営の困難さ」とは、「社会資源」として機能することを期待され「SHG」と名づけられた当事者グループにおいて、あくまで運営者が「社会的期待」に応えようとしていく過程で生じる、「社会的問題」に他ならないのである。

４．１．２　「SHG 運営の困難さ」に対する処方箋としての「当事者研究」
――SHG を「わたしたちのグループ」としてとり戻す！

前項で明らかにしたように、たとえ「SHG 運営の困難さ」が「社会的問題」に他ならないとしても、現に多くのグループで生じているとされている「SHG 運営の困難さ」という〈問題〉を解決する方策も別個、考える必要があるだろう。そこで本項では、「SHG 運営の困難さ」に対する処方箋として「当事者研究」を提示する。先行研究では、「SHG 運営の困難さ」の解決方法として、「他の SHG との交流会」(中田 2003: 81)や、より緊密に「専門家と当事者が「協働」」(三好 2014a: 701)することなどが挙げられている。しかし、これらのアプローチでは、「SHG 運営の困難さ」に対するメンバーの当事者化は促されず、〈問題〉は解決しないのではないだろうか。つまり、これらのアプローチでは、「SHG 運営の困難さ」を、あくまで「運営者個人が抱える問題」として解消こそできても、「グループの問題」と

[15] 実際、筆者がひきこもりサミットの「組織化」を推進していた当時、SHG の「治療的機能」の素晴らしさを説いた岩田(2008)の著書を参考にしており、ひきこもりサミットで「SHG 運営の困難さ」という問題が生じた背景には、専門家言説との関連が認められる。

して解決するには至らないのではないかと思われるのだ。また、このようなアプローチでは、SHG を「わたしたちのグループ」としてとり戻すことはできないのではないだろうか。

筆者は、「SHG 運営の困難さ」の解決方法として、「当事者研究」が有効だと考える。その際、ひきこもりサミットの「当事者研究」の実践は参考になるだろう。まず、「SHG 運営の困難さ」を覚える運営者が、運営に困難が生じるまでのグループの変遷を「研究」し、その成果をメンバー達と共有する。次に、その成果を基に、運営者を交えたグループのメンバーで「当事者研究」を行い、運営者が覚え、抱え込んでいた〈問題〉を「グループの問題」として立ち上げる。最後に、その解決方法をみんなで考えていくという手順である。

熊谷(2017: 20)は、「当事者研究」の成果を発表すると「確実に認知が変わるのは、「話す側」ではなくむしろ「聞く側」のほう」であり、「「話す側」からすると「環境側」が変化する」のだとしている。ひきこもりサミットの「当事者研究」でも、川田(2017)のレポートを読んだ「環境側」である立ち上げメンバー達の認知は大きく変わった。また、C さんから「ツラかったんだな～」と言ってもらい、「運営の困難さ」に対する共感を示されたことで、運営に困難を抱え、グループで“孤立感”を深めていた筆者は救われたような心地がした。

言うなれば、「SHG 運営の困難さ」とは、運営者がグループ運営に行き詰まりを覚えてもその事をメンバーに相談することができず、グループの中心にいながらにしてグループ内で“孤立感”を深めていくという一連の現象のことである。「当事者研究」には、このような現象を、「グループの問題」として立ち上げ、みんなで解決方法を話し合っていく雰囲気へと誘っていく力がある。「SHG 運営の困難さ」という、「運営者個人の問題」とされがちなテーマをそれぞれのメンバーが自らの〈問題〉として引き受け直す時に運営者が覚える、運営者としての“孤立感”からの解放こそ、「SHG 運営の困難さ」の解決なのではないだろうか。また、このような解決がグループでなされた時、専門家言説に絡めとられる形で「SHG の像」に沿うように「変に組織化」がなされてきた多くの当事者グループにおいても、SHG を「わたしたちのグループ」としてとり戻すことが可能になるものと思われる。

「SHG 運営の困難さ」という〈問題〉を抱え、グループ内で“孤立感”を深めていた運営者は、参加者の当事者化を促す「当事者研究」の実践を通して、メンバー達が、「SHG 運営の困難さ」に当事者意識を持つようになり、「グループの問題」と捉えるようになった時、グループ内で抱えていた“孤立感”から解き放たれる。そして、「当事者研究」の実践によって主体性をとり戻したグループは、専門家が規定してきた「SHG の像」から解き放たれ、「わたしたちのグループ」としてとり戻されるだろう。このような特徴を持つ「当事者研究」こそ、「SHG 運営の困難さ」の解決方法として最も理想的なアプローチだと思われる。

４．２　SHG 論をずらす

前節で、主に専門家によって作られてきた「SHG の像」によって、SHG という「支援の現場」で〈問題〉が生じていることを明らかにした。本節は、そのような認識に立って、従来の SHG 論をずらしていくことを狙う。１項で、SHG とは専門家が言うような援助形態などではなく、本来、「現われの空間」(Hannah Arendt 1994=1958: 320)[16]として機能させることにこそ活動の重点を置くグループであることを示し、運営者は専門家が言うような援助形態を意識して活動する必要はないことを明らかにする。２項で、当事者グループ

[16] 訳は、齋藤(2000)を参考とした。

において、ひきこもりサミットのように“素朴な感情”を大事に“原初的なSHG”として、「自分たちのための」(岩田 2008: 16)活動を行い続けることこそが重要であることを示す。

４．２．１　SHGの本質を問い返す―SHGは援助形態なのか

三好(2015: 55-56)は、「日本ではSHGとは何かというと、「治療的機能」を指向するグループを指してきた」としている。だがSHGとは、本当にその端緒から、「仲間同士が支え合うグループ」(久保 1998: 3)として活動する援助形態だったのだろうか。 筆者は、このようなSHG観は、客観的な視座を有するとされる専門家が、SHGを「なぜ同じ問題を抱える人々が集うことで回復していくのか」という興味・関心に基づいて長年「研究」し、専門的知識と比較することを通して確立してきた１つの捉え方に過ぎないと考える。

そもそも、SHGを立ち上げる際、共通の問題をもつ当事者であることは、本当にそんなに重要なのだろうか[17]。SHG という空間で本当に重要なのは、その空間を同じ問題を抱える当事者で構成することなどではなく、ある人が自分の抱える切実な問題を語っても、「治療のコミュニケーション空間」(石原 2013: 18)に囲い込まれることなく、むしろ語ることを通して、自分が「誰」(Hannah Arendt 1994=1958)であるかを他者に対して明らかにすることができるような空間、すなわちハンナ・アーレントの言う「現われの空間」のような空間として機能することにあるのではないだろうか。筆者は、SHGとは本来、ハンナ・アーレントが述べている「現われの空間」のような空間を志向するグループだったのではないかと考えている。以下で、アーレントの「現われの空間」という概念がどのようなものであるか、アーレント(1994=1958)と齋藤(2000)を参照しながら確認する。アーレント(1994=1958: 320)によれば、「現われの空間」とは、「私が他人の眼に現われ、他人が私の眼に現われる空間であり、人びとが単に他の生物や無生物のように存在するのではなく、その外形をはっきりと示す空間である」。しかしまた、アーレント(1994=1958: 320)は、「すべての人が行為と言葉の能力をもっているにもかかわらず、ほとんどの人たちはこの空間に住んでいない」としている。その理由について、齋藤(2000: 40)は、「私たちがほとんどの場合、互いを「何」として処遇するような空間のなかに生きているからである」[18]としている。つまり、他者を「何」の位相で眼差す空間にいる限り、「私は、他者の前に「現われる」ことはできない」(齋藤 2000: 40)のである。また、齋藤(2000: 42)は、アーレントの議論を踏まえ、「ある他者が私たちの前に「誰」として現われるのは、私たちがその他者にいだいている予期が裏切られ、私たちの「表象の空間」に裂け目が生じるとき」であり[19]、「他者に対する完全な予期をあきらめることが、「現われの空間」を生じさせる条件である」としている。齋藤(2000: 42)によれば、「予期する」とは「予め決定する」ことであり、「予め決定してしまわないということが、他者が「誰」かとして現われるための条件、すなわち他者の自由の条件なのである」。齋藤(2000: 43)は、「現われの空間」とは、「他者を自由な存在者として処遇する空間」であり、「「誰」へのアテンションが、「何」についての表象によって完全には廃棄されていないという条件のもとで生じる」、「予期せぬことへの期待が存

---

[17] たとえば、ひきこもりサミットの場合、メンバーはそれぞれ不登校、ひきこもり、セックスワーカー、精神障害といった背景を持っており、その当事者性は一様ではない。

[18] 齋藤(2000: 40)は、アーレントの「何」という概念を「男性であるとか、中年であるとか、父親であるとか、公務員である……といった仕方で描かれる、ある人の「アイデンティティ」」などのことだとしている。

[19] 齋藤(2000)は、「表象の空間」とは、他者が「何」であるかを予期する空間だとしている。

在するという意味で、ある種の劇場的な空間である」としている。

以上から、「現われの空間」とは、他者を「何」の位相で眼差すことをやめ、他者に対する予期を諦め、他者を自由な存在者として処遇し、お互いの行為と言葉によって私が他人の眼に現われ、他人が私の眼に現われる、ある種の劇場的な空間であると言えるだろう。

ひきこもりサミットはどのような点で、「現われの空間」と呼べるのか。過去の F さんのインタビュー(川田 2017)の発言を手がかりとして以下で考察を行う。インタビューの中で彼女は、自分のアイデンティティとなっている社会的にネガティヴと見なされがちだが彼女にとっては大事な経験を、一般的な他者に話す際と、ひきこもりサミットのメンバーに話す際のそれぞれの受け止められ方の違いについて以下のように述べている。

> あんまりそういう(社会的にネガティヴとされる)経験がない人にこういう(自分が経験してきた当事者としての経験を)話してもわかんないじゃん。わかんないし、こういうひきこもっていたとかっていう事実は、すごくまだマイナスに捉えられたりとか、「え、そうなの～」みたいな感じになるから、すごい話しにくいじゃない。でも、そういうのがオープンにできてしかもそれをもとに、別に「かわいそうだね」とかそういう話じゃなくて、「じゃあ、それってどういうことだったのかな」っていうのが一緒に読み解けるっていうのはそういう意味ですごく私にとって(ひきこもりサミット)はおもしろい場所。

つまり、一般的な他者の場合、F さんは、彼女が大事な経験と考えている不登校・ひきこもり経験を語ることを通して、自分が「誰」であるかを明らかにしようとしても、無理解な他者は、F さんのことを「過去にひきこもっていた人」と「何」の位相で眼差し、彼女の経験を一方的に「マイナスに捉え」る。それによって、F さんは、「表象の空間」に押しとどめられることとなり、他者の前に「現われる」機会を奪われ、自分の外形をはっきりと示すことができず、「自分自身を生きることができない」状態にあるということができる。

それに対して、ひきこもりサミットでは、F さんは自身の経験を気兼ねなく「オープンにでき」、彼女のことを「かわいそうだね」などと言うような者もいない。それは、メンバーの方でも、自分のことを「何」の位相で眼差してくる他者の視線に苦しめられてきたという経験があり、そのような自身の経験からもなるべく他者を自由な存在者として処遇しようという気持ちが強いためだと思われる。このような雰囲気を持つひきこもりサミットは、F さんにとって、「誰」として「現われる」ことを可能にし、伸び伸びと「自分自身を生きること」ができる「現われの空間」として機能していると言えるだろう。

「現われの空間」のような場では、一般的に、人には話しづらい自分が抱える切実なテーマを気兼ねなく話せる。そこでは、まさしく、自分の行為と言葉を通して、自分のことを「何」の位相で眼差してくる「表象の空間」とは異なり、自分が他者の前に「現われる」ことが可能となる。特に社会的にネガティヴとされる経験を持つ者ほど、他者の前になかなか「現われる」機会を持てず苦しんできた経験を持つのではないだろうか。なぜなら、いわゆる当事者とは、社会との折り合いに何らかの形で躓いた、あるいは失敗した経験を持つ人のことであり、そのような当事者にとって、下手な自分語りは、自らが「治療のコミュニケーション空間」に囲い込まれる可能性を孕んだ、「自分自身を生きること」をより困難なものにする危険を伴う行為だからである。

すなわち、社会との折り合いに躓き、「自分自身を生きること」が難しかった当事者にとって、他者の前に「現われ」、自分の外形をはっきりと示すことができる「現われの空間」は、「表象の空間」とは異なり自分の経験を偽る必要がなく、それゆえ「自分自身を生きる

こと」を可能にする空間だと言える。なにより、「現われの空間」は創成し、共有する者に“ワクワク感”や“楽しさ”をもたらす。あるいは、このような特徴を持つ「現われの空間」には、自然と当事者が「回復」していくような構造があるのではないかと思われる。

以上のように、SHG を問い返した時、従来のセルフヘルプ概念も捉え直す必要があるだろう。岩田(2008: 54)は、「セルフヘルプとは、自分を助け、さらに、お互いに助け合い、仲間になることです」としている。だが、このようなセルフヘルプの捉え方も客観的な視座を有するとされる専門家が、その興味・関心に基づいて導き出した１つの捉え方に過ぎない。セルフヘルプ概念を捉える際には、客観的に観察可能な当事者間でなされる営みや行為より、当事者の内発的な感情や思いにこそ焦点を当てるべきなのではないだろうか。

筆者は、人が「現われ」、「自分自身を生きること」を可能にする「現われの空間」のような空間を志向する SHG において、セルフヘルプとは以下のような概念として捉え直されるべきだと考える。すなわち、セルフヘルプとは、なによりもまず、個人が有する「自分自身を生きたい！」という強い意志であるということだ。つまり、セルフヘルプとは、あらゆる病や障害、あるいは既存の価値観、他者との関係に支配・搾取されることのないよう、それらによる抑圧下に晒されながらでも、それらによって自分を損なわれないよう、いかなる状況でも「自分自身を生きたい！」と強く願う、意志そのものなのであり、セルフヘルプ活動とは、そのような意志に基づいてなされる諸実践のことであるということだ。

また、以上のようなセルフヘルプの定義から SHG とは、「現われの空間」のような空間の創成と共有を志す、「自分自身を生きたい！」という強い意志を持つ当事者で集まり、「自分自身を生きる」ための諸実践を行うグループのことであると言うことができるだろう。

従来 SHG の定義において、メンバーが共通の問題をもつ当事者であることが重視されてきた背景には、SHG の周辺を巡る以下のような循環があるように思われる。つまり、まず、①AA や脳性マヒ者の青い芝の会[20]をはじめとする特定の当事者グループの「社会的成果」が注目を浴びる。②そのような当事者グループのあり方を客観的な視座から「研究」した専門家による言説が広まる。②´それに伴い、「同質性」の高い SHG が多く組織されるようになり、そのような SHG の経験者の回復体験記が著されるようになる。③その結果、社会資源としての SHG に「治療的機能」を求めるしんどい状態の人が集まるようになり、実質的に、「支援の現場」と化した SHG において運営者のバーンアウトが生じるという循環である。そして、③のような状況下でも「社会的成果」を挙げるグループが時折「発見」され[21]、あくまでもこのような循環は維持・再生産されていくのである[22]。だが、このような循環の観察に基づいて行われる SHG の「研究」こそ、むしろ、「SHG 運営の困難さ」を引き起こしているように思われる。上記のような循環については、「図４－１」で示した。

上記の循環モデルで明らかにしたように、現在、多くの SHG で「SHG 運営の困難さ」が生じている要因には、「自分自身を生きたい！」という強い意志を持たず、SHG を安価に利用できる治療代替と捉え、安直な「回復」を望む利用者(三好 2014b:146)が増加したことに求められるだろう。だが、SHG に利用者的な当事者が増えた背景には、現に専門家や SHG

---

[20] 岡(1985)は、「社会的機能」の高い SHG として、青い芝の会を例として挙げている。

[21] 現在、多くの SHG が「SHG 運営の困難さ」に直面している中、「社会的成果」を挙げているとして注目されているグループとして自死遺族の SHG が挙げられる(岡ほか 2011)。

[22] 岡ほか(2011)が、日本の自死遺族の SHG が持つ「社会的機能」を「発見」した様子を描いた論文は、端的に、以上で示したような SHG の周辺を巡る循環モデルが維持・再生産されていく様子の一端を窺い知ることができる資料となっていると言えるだろう。

経験者が「回復資源」や「回復の場」としてSHGのことを語ってきた事実があることを見過ごしてはならない。このようなSHGのイメージが広まった結果、しんどい状態にある人がSHGという社会資源に自らの「回復」を期待し、寄りかかろうとするのは当然のことであり、「治療的機能」をただ期待するだけの利用者が現れるのはあたり前のことだからだ。

だが、「回復の場」としてのSHG利用者が増えても運営者の負担は増えるばかりであり、「会員二極化」は止まらず、運営者のバーンアウトはなくならないだろう。それならば、SHGのメンバーは最初から「自分自身を生きたい！」という強い意志を持つ者であるかどうかで選別した方がよいのではないだろうか。ただでさえ、創成し、維持していくのが難しい「現われの空間」の共有を志すSHGにおいて、「自分自身を生きたい！」という明確な意志を持たないメンバーは加入させるべきではないように思われる。また、ユーモアの共有の難しい気が合わないメンバーの存在も「現われの空間」の創成を難しくするだろう。

SHGという、現在、しんどい状態の人のための「回復」のための「支援の現場」となっている空間から、利用者的なメンバーが増加していく流れを食い止めないことには、「SHG運営の困難さ」が生じる従来の循環を断ち切ることはできないのではないだろうか。そのような従来の循環を変えるためにも「自分自身を生きたい！」という強い意志を持つメンバー以外は、一度、SHGから選別することが望ましいのではないかと思われるのである。

向谷地(2005: 289-290)は、「「あなたとの関係にわたしは寄りかからない」という“わきまえ”があるかないかが、その人との関係を決めてしまうのではないか」としている。つまり、「お互いが微妙な自立の雰囲気をもちながら、きちんとお互いを必要として、特別に意図しないで助け合う。その程度の関係が、いちばんみんなのちからを出しやすい」ということだ。このような指摘に従えば、「共通の問題を持つ人たちによる、相互援助のためのグループ」という従来のSHG概念に基づいて組織されるSHGは、そもそも、「お互いが微妙な自立の雰囲気」をもつことを難しくし、「みんなのちから」がうまく発揮されない循環に陥りがちなように思われる。「同質性」の高い空間を志向し、「回復資源」とされるSHGに寄りかかることを期待する利用者的な当事者が増加している状況では、「お互いが微妙な自立の雰囲気」を保ち、うまく「みんなのちから」を発揮することは困難を極めるだろう。このようなSHGという「支援の現場」で起こるのが、運営者のバーンアウトなのである。

「特別に意図しないで助け合う」こと。人とひととが寄り集まって、それぞれにしんどい物を抱えながらも楽しくやっていこうとする時、これが一番大事なのではないだろうか。運営者がバーンアウトするような循環に陥らないためにも、「特別に意図しないで助け合う」ことができるような関係性を築けるメンバー同士がSHGを組織することが望ましいのではないだろうか。なにより、専門家が期待する援助形態として機能させるために、「支援の現場」と化したSHGで運営者が身を削り、バーンアウトする必要はないのではないか。

４．２．２　“原初的なSHG”というあり方―「自分たちのための」活動をとり戻す！

ひきこもりサミットの「当事者研究」から、専門家によるSHG言説に絡めとられず、「変に組織化」しない、“原初的なSHG”という当事者グループのあり方は、以下のようなものとして導き出された。すなわち、“原初的なSHG”とは、Fさんの表現によるならば、「社会的にネガティヴにされるような」経験について、「すごく自然に話せる」関係にある「なんとなくフィーリング合う」メンバーで、「次、また会いたいね～」、「次、また今度こういう話したいね～」といった“素朴な感情”を大事にするグループであるということになる。

つまり、“原初的なSHG”とは、一般的に、人には話しづらい自分が抱える切実なテーマ

を気兼ねなく話せる、ユーモアを共有する気が合うメンバーが、お互いにまた会って話したいというモチベーションに基づいて継続的に活動していくグループであると言える。“原初的なSHG”では、共通の問題をもつ当事者であるといったような「問題縁」(斎藤 1995: 210)は重要ではない。メンバーに共通の「問題縁」があるかどうかよりも、「個人」として気が合うかどうかのほうがグループとして活動していくうえで、より重要度は高いからだ[23]。

Cさんは、ひきこもりサミットのメンバーの共通点は、「マイナス(中略)だって(社会的には)言われる」ような経験をしており、「それが自分のアイデンティティの一部に組み込まれて」いることにあるとしている。つまり、ひきこもりサミットのメンバーは、過去の苦しかった当事者としての経験が、今の自分のアイデンティティを形成するうえでとても大切なものであるという感覚を持つ当事者であるということに重点が置かれていると言える。

Tさんは、立ち上げメンバーで初めて集まった時、「なんか“新しいところ”に行ったような気がした」としている。Tさんは、立ち上げメンバー達は、それぞれ、社会的に「マイナス」と「思われがちなことを経験して」おり、「お互いにわからないところもありつつ共有し合ったから、なんか、その共有し合って、で楽しかった。なんでそれが楽しかったのかもわからないけど」、それは、「“今まで経験したことのない楽しさ”」だったとしている。

Cさん、Tさんの発言からも、「問題縁」でグループを組織するよりも、気の合うメンバーで、一般的にはすこし話しづらいことを話していき、「お互いにわからないところもありつつ共有」していく中で得られる「“新しいところ”に行った」ような感覚や「“今まで経験したことのない楽しさ”」を共有することの方が、当事者グループとして理想のあり方なのではないかと思われる。これが、筆者の考える“原初的なSHG”というあり方である。

しかし、ひきこもりサミットのような“原初的なSHG”という自然発生的なグループを「変に組織化」させずに活動を継続させていくあり方は、日本のSHG研究の権威である岡(1994: 67)に言わせれば、「「ひとりだち」や「ときはなち」に向かうための十分な知識や体験を蓄積していない」、「未熟」なSHGと判断されかねないものである。だが、ここまでの議論から明らかなように、このような岡の価値判断は、「客観性」を装っているが、極めて恣意的な価値判断に過ぎないと言える。そもそも当事者が活動するグループであるSHGを「未熟」と価値判断する際の、その「価値」は何に由来するのだろうか。それは、SHGを「問題解決のための一つの社会的方法」(岡 1994: 65)と捉える、岡が自身の興味・関心に基づいて創り出した、SHGを見る際の1つの「価値」でしかないのではないだろうか。

社会資源として機能しうる当事者グループをSHGと名づけ、一方的に「社会的機能」や「治療的機能」を社会的に発揮することを期待する岡に代表されるような専門家の姿勢は、野崎(2011: 167)が指摘しているような、「語り出す当事者を英雄化」し、「「語ることのできる主体」を期待するだけの非当事者」でしかないように思われる。すなわち、SHGについて「語ることのできる主体」であり続ける専門家とは実は、「社会的成果」を挙げることのできる当事者グループや当事者の登場を期待するだけの非当事者に過ぎないのだ。そのような姿勢は、「いまだ沈黙せざるを得ない当事者たちへ向けた無言の圧力」(野崎 2011: 167)

[23] 綾屋(2010: 84-90)は、自身の長年の生きづらさを、「アスペルガー症候群」と名づけられ、「同質の仲間で作られた小さなコミュニティ」に自分の居場所を求めるが、すぐに、「「お前は私たちと同じ、本物のマイノリティなのか」とコミュニティにいる資格を問われるようなまなざしを向けられる息苦しさ」を覚えるようになったとしている。これは、「問題縁」に基づいてSHGを組織しようとすると、そのメンバーを「何」(Hannah Arendt 1994=1958)の位相で眼差し、選別しようとする力が働くために生じる弊害の一例だと言えるだろう。

となりうると思われるが、専門家をはじめとする非当事者にその自覚はあるのだろうか。

そのような姿勢は、未だ「社会的成果」を出せていない当事者グループや当事者が持つ「力」を社会に還元させる方向へと強く動機づけ、社会との折り合いに躓いてきた当事者の多くは、そのような姿勢や言説[24]に絡めとられる形で社会的承認へと水路づけられていく。なぜなら、社会との折り合いに失敗してきた当事者にとって、社会的承認とは喉から手が出るほど欲しいものだからである[25]。あるいは、そのような状況にある当事者の「力」を「自分自身を生きる」方向にではなく、社会的承認へと水路づけるのは“罪”なのではないか。

“原初的な SHG”とは、どんな「価値」にも振り回されず、絡めとられぬよう“素朴な感情”を大事にあくまで「自分たちのための」活動をし続けるという一種の抵抗だと言える。だが本来、SHG とは、「「自分たちの」「自分たちによる」「自分たちのための」グループ」(岩田 2008: 16)だったはずである。ひきこもりサミットは、どんな「価値」よりも、現にグループに所属する自分たちがワクワクするような楽しい活動を続けていくことがなによりも重要だと考えている。すなわち、“原初的な SHG”としてのひきこもりサミットとは、「自分たちのための」活動を楽しく続けていった先に、特別に意図せずとも、「社会的成果」を出すこともあるだろうと信じるグループなのである。

そもそも、従来の SHG 論で「社会的機能」の代表格とされている青い芝の会にしても、「治療的機能」の代表格とされている AA にしても、最初から「社会的成果」を意識して活動を行っていた訳ではないのではないか。まさに、「自分自身を生きたい！」という強い意志に基づいて行われる「自分たちのための」セルフヘルプ活動が結実した姿[26]を、専門家が客観的な視座から「社会的成果」として観察したに過ぎないように思われる。青い芝の会や AA など、特定の問題状況を生きてきた当事者や当事者グループが「社会的成果」を挙げた姿の観察を通して、「共通の問題を持つ人たちによる、相互援助のためのグループ」は、社会資源として機能するのだと一般化し、普遍的な定義をすることは暴論だと言わざるをえない。なぜなら、社会との折り合いに躓いてきた当事者にはそれぞれに、自らが生きてきた固有の文脈があり、持つ「力」にも厳然として差が存在するからだ。当然、躓いた問題の性質によって置かされている社会的状況もまったく異なる。そのように、現にこの社会に生きる当事者の文脈を無視して、一方的に当事者の持つ「力」に期待をし、当事者グループに対しては「SHG の像」を押し付ける非当事者の姿勢は、やはり“罪”なのである[27]。

---

[24] たとえば、田中(2001: 173-174)の精神障害当事者に「精神障害を体験した異質性を武器に、同じ精神障害者という枠組みを超えて、広く地域社会で果たす役割を発揮する共生社会形成への橋渡し機能」を期待するという言説などは、このような言説の好例だと言える。

[25] 田中(2001: 174)は、オルタナティブサービスに従事する精神障害者達は、「何よりも自分たちの実践が社会的に評価され、定着・発展することを望んでいる」としているが、このような当事者のニーズはどのような社会的文脈の上に形成されているのだろうか。当事者にこのようなニーズが形成される過程を今一度、慎重に検討する必要があるのではないか。

[26] 青い芝の会では、重度の身体障害者が地域で自立生活を可能にするための制度の獲得を、AA では、セルフヘルプ活動によるアルコール依存症からの「回復」がそれぞれ挙げられる。

[27] たとえば、青い芝の会に代表される重度身体障害者のセルフヘルプ活動が結実し、地域で自立生活を送るための制度が獲得されていった背景には、家庭か施設の２つしか生活の場がなく、「自分自身を生きること」ができずにきた当事者の強烈な生きづらさがある。そのような社会と当事者との相互作用の中で生じる生きづらさの“反動”として、運動が盛り上がり、現実の制度の獲得につながっていったという社会的・歴史的文脈を決して軽んじてはならないだろう。日本の障害者の自立生活運動については、安積ら(2012)に詳しい。

４．３　「生きるための技法」について

本節では、１項で、本研究をぼくの生き方へと接続させ、ぼくにとってのSHG・「当事者研究」を「生きるための技法」として再定義する。２項では、SHGという「生きるための技法」が専門家によって「制御」(Said 1993＝1978: (上) 140)されてきた事実を確認する。３項では、本研究で得られたSHG研究の知見を手がかりとして、近年、注目を浴びている「当事者研究」もSHGのように変に理論化され、「制御」される危険にあることを確認し、「生きるための技法」としての「当事者研究」を「制御」されないための方法を考察する。

４．３．１　ぼくと「生きるための技法」―ぼくにとってのSHG・「当事者研究」

以下では、この「研究」をぼくの生き方に接続させていきたい。ぼくの記憶は父が母に激しい怒声を浴びせ、ビール瓶を投げつけるという暴力の場面から始まる。「川田家」の家庭内暴力は、一度落ち着いても、いつまた起こるかわからない。そんな緊張感がぼくの身体に深く刻み込まれた。そんな環境で育ったぼくは、小学校時代に初めての自殺企図をする。中学時代は、毎日10回は「死にたい」と思っていた。高校時代は、不登校になった自分を罵倒してくる父と、不登校になってしまった自分をいつも呪っていた。この頃から、「なぜ、自分はこんな人間になってしまったのか」という問いに駆られ、＜自己分析＞を始めた。この社会の全てを信じないことで、なんとか自分を生き永らえさせてきたぼくにとって、“言葉”だけは、この社会の中で唯一まだ信用できる「味方」であったように思われる。

ぼくにとって、長年、自分の人生はとても不本意でかつ、受け入れることができないものであった。そのためなおさら、ぼくは＜自己分析＞をせずにはいられなかったのだと思う。そんなぼくであったが、大学に入ってから自然と人の輪が広がって行った。そこでは、ぼくは、自由に自分のことを語ることができた。今までの＜自己分析＞の成果を聞いてもらうことができた。そのような経験を経て、少しずつぼくは自分の人生を受け入れていき、他者や自分自身に対する信頼感をとり戻していったと言える。思えば、ぼくの話を聞いてくれた人達自身、いろいろと大変な経験をしてきた人達だった。その人達の前では、ぼくは初めて「自分」として振る舞えるような気がした。自由に息が吸えるような気がした。

あるいは、せずにはいられなかったために大量に溜まっていたぼくの＜自己分析＞の成果を聞いてくれる相手ができた頃から、ぼくの「当事者研究」は始まっていたように思われる。熊谷(2017: 18)は、べてるの家で、「当事者主権と依存症自助グループという、交わらないはずの２つが化学反応をおこして「当事者研究」は生まれてきた」としている[28]。だが案外、「当事者研究」とは、社会との折り合いに躓き深く傷ついた当事者が、いかなる困難な状況にあっても、それでも自分が少しでも楽に息ができる場所を求め、「自分自身を生きたい！」ともがいた先で自然と編み出す、「生きるための技法」なのではないだろうか[29]。

---

[28] 青い芝の会に代表される日本の自立生活運動とAAとは、従来のSHG論においてもそれぞれ「社会的機能」の高いグループ、「治療的機能」の高いグループとされ、その差異が注目されてきた。それに倣うかのように、「当事者研究」の理論化を推進する熊谷も、両者を相性の悪いものとして捉えている。しかし、「当事者主権」と「自己統治の断念」とは、それぞれの問題状況を生きる当事者が、それぞれの社会的文脈の中で編み出した、まさに、「生きるための技法」という観点から捉えれば、むしろ強い共通性があるのではないだろうか。

[29] 向谷地(2006a: 53)も、「当事者研究」のことを、「精神障害を抱える当事者にとっては、

そんな風に周りに人が増え、余裕ができてきたぼくは、積極的に自分の経験を人に話すようになっていった。ぼくには、自分の経験を話すとぼくのことを遠巻きに眺め出す他者に対する強い違和感があった。だからこそ、むしろ積極的に自分の経験を対外的に発信してきた。こんな望んで歩んできた訳でもない「不本意な人生」を語るぼくのことを異質な他者として遠巻きに眺め出す周囲の反応が、どうにもやりきれずとても悔しかったからだ。

積極的に自分のことを話していくと、ほとんどの人がぼくから離れていった。だが、同時に少なくない人が周りに集まってきた。社会的に言いづらいとされている経験を積極的に話しているぼくの姿を見て、彼らはぼくに対してなら、一般的に、人には話しづらい自らが抱える切実なテーマを気兼ねなく話せると思って近づいて来てくれたようだった。

そのような友人の中から、特に「この人とこの人を会わせてみたらおもしろそうだ！」と考えを巡らし、実際に引き合わせて殊の外うまくいき、初めてグループとして組織されたのがひきこもりサミットであった。そんなぼくにとって、SHG とは、専門家が言うような援助形態などでは断じてなく、ぼくがぼくとしてこの社会で生きていくために自ら編み出した「生きるための技法」なのである[30]。ぼくは、セルフヘルプ活動を通して、自分にとっても、自分以外の当事者として生きる友人らにとっても楽に息を吸うことができる「現われの空間」を築くことに成功し、自分の「生き方」を周囲に認めさせてきたと言える[31]。

アーレント(1994=1958: 320)は、端的に「現われの空間」とは、「共に活動し、共に語るというこの目的のために共生する人びとの間に生まれるのであって、それらの人びとが、たまたまどこにいるかということとは無関係である」としている。言い換えれば、「自分自身を生きたい！」という強い意志を持つ当事者同士が出会い、お互いを自由な存在者として処遇し、お互いの行為と言葉によって私が他人の眼に現われ、他人が私の眼に現われる時、それがどこであっても「現われの空間」は生じるのである。このことから、潜在的には、あらゆる人間関係においてセルフヘルプ活動は成立しうるということが言えるだろう。

４．３．２　専門的知識と「生きるための技法」―SHG の事例から

本論では、当事者発信の援助形態として 1980 年頃から日本で「研究」されてきた SHG について論述してきた。繰り返しになるが、日本に SHG 概念が輸入された当初、多くの専門家たちは「SHG の援助の有効性についてはまだまだ批判的」(中田 2003: 75)であった。そのような背景には、SHG が当時の専門家によって、「非専門的ないし「しろうと的」な援助形態」(久保 1981: 254)と見なされていたことを挙げることができるだろう。

社会的な支援体制も皆無で、安心して暮らせる条件に乏しい浦河だからこそ、育まれたともいえる当事者活動の賜物」としており、浦河べてるの家の「当事者研究」も、ぼくと同様、困難な状況に生きる当事者が編み出した「生きるための技法」であることがわかる。

[30] 斎藤(1995)によれば、AA が活動をはじめた当時のアメリカでは、公道で酔っ払っている人を逮捕、収監する法律があり、高い費用のかかる精神科に行くこともできない、特に中流階級の男性で知恵を絞り出して生まれたのが AA だとされている。つまり、現在、SHG の源流とされている AA という当事者グループのセルフヘルプ活動も、当初は、困難な状況にあったアルコール依存症当事者が編み出した「生きるための技法」であったと言える。

[31] 向谷地(2006a: 53)は、「当事者研究」とは、「統合失調症など精神障害を抱えた当事者自身が、自らの抱える固有の生きづらさと向き合いながら問い、人とのつながりの中に、にもかかわらず生きようとする「生き方」そのものということもできます」としている。このような「当事者研究」的な生き方は、まさしく、ぼくの「生き方」と重なるものである。

このような専門家からなされる、SHG をはじめとする当事者発信の「生きるための技法」に対する批判について、エドワード・サイードの以下の文章はとても示唆的だと思われる。

> 明らかに異質で遠く隔たったものは、どうしたわけか、かえってよりなじみ深い地位を獲得するものなのだ。人は事物を、まったく新奇なものとまったく既知のものとの二種類に分かつ場合には、判断を停止する傾向がある。新しい中間的カテゴリーが浮かび上がってきて、そのために我々ははじめて見る新しい事物を、既知の事物の変形にすぎないと考えることができるようになるからである。こうしたカテゴリーは、本質的に、新しい情報を受け取る手段であるというより、むしろ、すでに確立された事物の見方に対して脅威と見えるものを制御する手段である。 (Said 1993＝1978: (上) 139-140)

SHG という、専門家にとって「明らかに異質で遠く隔たったもの」は日本に輸入された当初、「心理療法とセルフ・ヘルプ・カウンセリング」(村山 1979: 11)という形で、心理療法と並列させられ、あたかもカウンセリングという「既知のもの」の一技法―つまり、「既知の事物の変形」―として紹介されていた。あるいは、SHG という当事者が編み出した「生きるための技法」のことを、援助形態と呼ぶ専門家は、SHG という「はじめて見る新しい事物」を、集団精神療法等の「既知の事物」と比較して「研究」することで、「すでに確立された事物の見方に対して脅威と見える」SHG を、「制御」していったのではないだろうか。

つまり、AA という当事者グループが専門家のなしえなかったアルコール依存症からの「回復」という「社会的成果」を挙げた事実を受け、SHG という当事者発信の「生きるための技法」は、当時の専門家の眼に、「脅威」として映ったのだと思われる。そこで、専門的知識という「すでに確立された事物の見方」と対比させる形で SHG には体験的知識があるとし、「異文化」(松田 2002: 51)としての SHG に対する理解のためや社会資源として活用するための「研究」を通して[32]、暗に「制御」していったのだ。現在、「SHG を社会に「全くない新たなパラダイム」であるという認識は薄くなっている」(三好 2014a: 701)要因として、自覚の有無にかかわらず、結果的に、専門家が SHG という「脅威」を「制御」するための「研究」を長年行ってきたことを１つ挙げることができるだろう[33]。

４．３．３　「当事者研究」が「制御」されないために

熊谷(2017: 160)は「当事者研究の支援効果に関するエビデンス」という論文の中で、「当事者研究がもつ支援法としての側面については、十分なエビデンスが未だ確立されていないとして、批判されることもある」ことから、「当事者研究の支援法としての効果検証」を行っている。しかし、このような批判は、本当に応答に値する批判なのであろうか。あるいは、専門家が「科学的」とか、「客観性」を根拠に当事者発信の技法を批判する際、そこ

---

[32] たとえば、岡田(2015: 38)は、専門家は、「AA を研究しながら(中略)アルコールリハビリテーションプログラムを立ち上げそれを洗練させてきた」としているが、これなどは、端的に言って、当事者が編み出した「生きるための技法」を、専門家がその「研究」を通して、専門的知識に吸収・統合していった歴史と捉えることもできるのではないだろうか。

[33] 以下の論述は、日本の SHG 研究が約 40 年間にわたって SHG という「すでに確立された事物の見方に対して脅威と見えるもの」を、「研究」という科学的な営みを通して「制御」してきた１つの成果がよく窺える文章だと言える。「SHG という回復資源の機能が十分に果たされていくために、(中略)当事者の主体性を重んじてきた SHG は現在、専門家と当事者が「協働」する在り方を模索する段階にあるのではないだろうか」(三好 2014a: 701)。

には、前項の SHG の事例で見たように、既存の知の体系としての専門的知識に当事者が編み出した「生きるための技法」を絡めとろうとする権力が働いているのではないだろうか。

「当事者研究」において評価されるべき点は、その科学的評価に関する「研究」を熊谷という当事者が先頭に立って行っていることにあると言える。SHG という「生きるための技法」が、ほぼ一方的に専門家によって評価され、価値判断されてきた歴史からすれば、そこに可能性がないではない。しかし、熊谷が行っている当事者発信の「価値」に基づく科学的エビデンスを作成するという姿勢は、やはり、科学的評価にすり寄ることに他ならない[34]。それは、既存の知の体系が、「当事者研究」という当事者が編み出した「生きるための技法」を取り込むことを促し、「当事者研究」が持つインパクトを削ぎ落とすことになるだろう。あるいは、専門家である中嶋(2017)が、自身が担当する統合失調症患者に対して、「当事者研究」の実践を動機づけ、その実践から症状が改善されていく様子についてまとめた「統合失調症の当事者研究」のような「研究」から察するに、「当事者研究」が、認知行動療法の一種と呼ばれるようになり、そのインパクトを失くす日は近いのかもしれない[35]。

当事者が編み出す「生きるための技法」は発信される度に、既存の知の体系に取り込まれてきたと言える。「当事者研究」も直に、SHG のように陳腐なものになってしまうかもしれない。だが、たとえそうなったとしても、ぼくはぼくの「当事者研究」を実践し、仲間と共に自分が「現われ」、この社会の中に少しでも楽に息ができる環境を探し、あるいは創り、しぶとく生き抜きたいと思う。なぜなら、「当事者研究」とは、不本意な人生を送ってきた当事者が、にもかかわらず「自分自身を生きたい！」という強い意志に駆り立てられ、より楽に自分が息をすることができる環境や方法を探究しようとする、せずにはいられない実践なのであり、それは自分自身の生に対する渇望からなされる、「生きるための技法」だからである。これを、見田(2008)の表現を借りて言い換えると以下のようにまとめることができる。すなわち、「当事者研究」とは、いかなる困難な状況下に置かれても、この社会において尽きなく生きることを志し、探究しようとする人のための方法なのであり、尽きなく生きようとする意志を持つ限りにおいて、すべての人に開かれた方法なのである。

「現われの空間」が「自分自身を生きたい！」という強い意志を持つ者同士の間であればどこにでも生じ、潜在的にはすべての人間関係においてセルフヘルプ活動が成り立つのと同じ様に、「当事者研究」も潜在的にはすべての人に開かれた方法である。しかし、熊谷(2017)のように「みんなの当事者研究」などというような形で啓蒙し、普及しようとするのはいかがなものだろうか。そのように安易に門戸を広く開放してしまったら「当事者研究」は、やはり SHG のようにすぐに陳腐なものになってしまうように思われる。だからこそ、ぼくとしては「当事者研究」は、あくまでも、尽きなく生きようとする意志を持つ限りにおいて、すべての人に開かれた方法であるという条件をつけておきたいと思うのである。

---

[34] そもそも、べてるの家で生まれた「当事者研究は、科学的評価の対象になることを拒む性質を持っている」(石原 2013: 57)。それは、べてるの家の人びとには、「当事者研究」のような当事者発信の「生きるための技法」は、社会的に有益な物として科学的評価に則る形で変に理論化してしまうと陳腐なものになるという“わきまえ”があるからではないか。

[35] 石川ほか(2017: 175-176)は、「当事者研究」の支援法としての側面への興味・関心から、「当事者研究」を、当事者という問題を抱える存在のための「エンパワーメント・アプローチ」と捉えたうえで、そのような「当事者研究の効果を客観的に確認する」ための「研究」を行っている。しかし、このような科学的な「研究」は、「生きるための技法」としての「当事者研究」が持つ意義やインパクトを矮小化するものでしかないように思われる。

以下で、ぼくの考える「当事者研究」という方法の一端を示すために、べてるの家のメンバーの言葉(向谷地 2006b: 113)を手がかりとして、ぼくの考える当事者でかつ、研究者である、または、「当事者研究」を実践する者としての「当事者研究者」について考察する。

「自分は、今思えば、ものごころついた時から“鬱”だったような気がします。そして、漠然といつも死を恐れていました。…現実の死との向き合いを通してわかったことがあります。それは“生きよう！”ということでした。それも“死ぬために生きる”ということです、生きていなければ、死ねないことに気がついたのです。今のテーマ、究極は“死”です。“いかに死ぬか”ということは“いかに生きるか”ということとイコールなのです。突きつめると、私自身は一生“当事者研究”の対象、一生求道者、一生一病者なのであり、一哲学者―悩み尽きぬ存在であるだろうと思います。でもそれは決して悲観的なわけではなく、“一生情けない自分とつきあえる特権”とすら感じられます。」

上記の言葉によれば、「当事者研究者」とは、自分自身のことを「一生“当事者研究”の対象」とする、「一生求道者」で、「“一生情けない自分とつきあえる特権”」を持つ存在だと言えるだろう。従来「問題を抱える存在」と眼差され、分析され、語られ、「もの言わぬ他者」として一方的に規定され続けてきた当事者は、「当事者研究」の実践を通して、「当事者研究者」となる。この時、「当事者研究」とは、実践する者にとって以下のような意味を持つだろう。すなわち、今まで「語ることのできる主体」によって、自らの歩んできた人生の「価値」や経験の意味を一方的に価値判断され、「もの言わぬ他者」として規定されてきた当事者は、「当事者研究」の実践を通して、「もうこれ以上、社会的価値観に基づいて、一方的に自分のことを解釈させないぞ」という“決意”と共に、「自ら新たな物語を生み出していく存在」(中村 2011: 225)になるということである。これはつまり、ある人が「当事者研究」の実践を通して行う「ライフヒストリーの書き換えはアイデンティティの政治そのものである」(石川 2000: 49)ということだ[36]。また、このような“決意”に基づいて行われる「当事者研究」は、当事者の経験を一方的に「マイナスに捉え」(F さん)、自由な存在者として処遇しようとしない周囲の人や社会に対する“叫び”という意味を持つだろう。

非当事者は、このような“決意”の下、“叫び”を挙げる「当事者研究者」に対して、「勇気があると賞賛」(野崎 2011: 167)しがちであるが、これは問題なのではないか[37]。なぜ、「当事者研究者」は、“決意”を以て、“叫び”出さなければならなかったのか。野崎(2011: 167)は、このような状況において、「まず、誰が、何がそこまで当事者を語れなくさせてきたのかが問われるべきである」としている。つまり、ここで真に問われるべきなのは、「当事者研究者」が“叫び”出さずにはいられなかったような「状況にまで追い込んだ責任は、いったい誰に、何にあるのか」(野崎 2011: 167)なのであって、そのような自省もなしに、

[36] これに比べて、貴戸(2004: 228)は、不登校についての「当事者研究」の著書の中で、当事者が調査者を前にして、「語ることのできる主体」として自らの経験について調査者の「研究」のために語ったとしても、「「〈当事者〉の声」は聞き手の枠組みによって切り取られ、聞き手の主張を根拠づける「アリバイ」とされることがしばしばであった」としている。

[37] べてるの家の「当事者研究」の生みの親の１人である河崎寛は、「当事者研究」が注目を浴びるようになり、講演に出向くようになると「当事者研究をはじめた先駆者だと言われて、最近、いろいろな人から褒められることが多いんだけど、河崎寛は、ぜんぜん立派じゃないし、褒められるような人間じゃないんです。」(向谷地 2006: 92-93)と、他者から「語り出した当事者」として一方的に賞賛されることに強い違和感を示している様子が窺える。

ただ“叫び”出した「当事者研究者」に対して賞賛を送るのは問題だということである[38]。

べてるの家には、「べてるウイルス」(川村ほか 2006: 84)という概念があり、「特に強い感染者は通称「べてらー」と呼ばれ、判っているだけでも、10 人を越える」(川村ほか 2006: 85)とされている。「べてるウイルス」は、「人と場を豊かにする善玉ウイルス」(川村ほか 2006: 89)とされており、その感染源は、「当事者研究者」として生きるべてるの家のメンバーだとされている。もし仮に「当事者研究者」に、この社会において果たすべき役割があるとするならば、それは、「当事者研究」が持つ“ワクワク感”や“楽しさ”を自らの実践を通して周囲の人々に発信し、「べてらー」に代表されるような感染者を増やしていくことにあるのではないだろうか。このように捉えると、「当事者研究」には、「理性を公的に使用すること」(Kant 1950=1784 :10)に通じるようなところがあると言えるように思われる。

つまり、「当事者研究者」が自らの“ワクワク感”や“楽しさ”をモチベーションとして、「当事者研究」の成果を出し続けることで、その“ワクワク感”や“楽しさ”に惹かれた人達が感染者となり、「当事者研究」の実践者が増加していくということだ。そして、そのような「善玉ウイルス」の拡散が、「現われの空間」の拡張へとつながっていくのである。

石川(2004: 207)は、人間関係において、「先に裸になっている人がいると、裸になることが恥ずかしくなくなる」としており、重度の身体障害者が地域で自立生活を営めているのは、制度の確立はもちろん、「自分のすべてをさらけ出して全力で生きている障害者」の許には、「自分を開示したいのになかなかできないという人が集まる」からだとしている。また、向谷地(2006: 27)は、「弱さ」という従来人に見せてはならないとされてきた個人が抱える脆弱な部分に関する情報は、むしろ「公開されることによって、人をつなぎ、助け合いをその場にもたらします」としている。そして、「「弱さの情報公開」は、連携やネットワークの基本となるもの」であり、「それをプライバシーとして秘匿してしまうことによって、人はつながることを止め、孤立し、反面、生きづらさが増すのです」と述べている。

以上から、以下のようなことが言えるだろう。つまり、「自分自身を生きたい！」という強い意志を持ち、「自分のすべてをさらけ出して全力で生きている」、「弱さの情報公開」を積極的に行う、自らのことを「一生“当事者研究”の対象」と捉え、「一生求道者」として生きる「当事者研究者」のような存在は、「自分を開示したいのになかなかできないという人」を呼び寄せ、本人や集まってきた人にとってもある種心地よい―「現われの空間」のような―空間を創り出す「力」になりうるということだ。なぜなら、「当事者研究者」のように「“一生情けない自分とつきあえる特権”」を有する存在は、「人をつなぎ、助け合い」をその場にもたらす「力」になりうるからだ。あるいは、「当事者研究者」のような存在の増加は、人びとが「つながることを止め、孤立し、反面、生きづらさが増す」、現代社会の閉塞した状況を打破し、この社会の中に「現われの空間」を拡張していくような「力」となりうるのではないかと思われるのである。だからこそ、社会との折り合いに躓き、失敗した当事者は、その持つ「力」を「自分自身を生きる」ことに注力する方がよいのである。

「当事者に学ぶ」(半澤 2001)とか、「私たちワーカーは SHG から何を学べるのだろうか」

---

[38] 野崎(2011)の指摘を参照すれば、従来の SHG 論とは、特定の問題状況を生きてきた当事者が、その置かれた社会状況のゆえに挙げずにはいられなかった“叫び”によってもたらされた社会的影響を、その客観的な視座から「社会的成果」として「発見」した専門家が、その当事者が生きてきた社会的文脈をあまり考慮することなく、変に理論化を行う中で、「SHG の像」を作り上げていった問題のある「研究」だったと言えるのではないだろうか。

(岡ほか 2011: 180)といった表現は、当事者や当事者グループに対して「好意的な専門家」によって、度々使われてきた言葉である。「当事者研究者」には、このように当事者や当事者グループにすり寄ってこようとする「好意的な専門家」をはじめ、多くの専門家が着込んでいる「白衣という「権威」」(向谷地 2002: 214)を思わず脱がずにはいられなくなるような、「「専門家」も例外ではなく、その場においては、だれもが等しく「当事者」」(向谷地 2005: 293)として「現われ」たくなるような、「現われの空間」をこの社会に築いて行くような役割があるように思われる。そのような「現われの空間」を当事者と専門家が共有することができた時、初めて、日々の治療の実践や「研究」を通して「社会的成果」を挙げることを社会的に期待されてきた専門家は、それゆえに身にまとわずにはいられなかった「白衣という「権威」」から解き放たれ、ただ、専門的知識を有する固有の名前を持つこの社会に生きる１人の人間として、当事者と相対することが可能になるのではないだろうか。

「当事者研究」とは、「弱さ」を抱えながら、それでも、この社会の中で尽きなく生きようとする人のための方法であり、SHG とは、そのような人々にとってのグループであり、活動拠点なのではないだろうか。そして、「当事者研究者」とは、そのような拠点を超え出て、困難な状況を生きてきたために自ら編み出さざるを得なかった「生きるための技法」を周囲に向けて発信し、より多くの人と共に「弱くある自由」を追求する空間としての「現われの空間」をこの社会に拡張していく役割を担う人のことなのではないかと思われる。

このような一大プロジェクトは、遅々として進まないかもしれない。たとえそうだとしても、「はやく、ゆっくり」(横塚 2007)とやっていけばよいのである。間違っても、「みんなの当事者研究」(熊谷 2017)というような形で、拙速に「当事者研究」を広く一般に啓蒙すればよいというものではないだろう。そのような形で、「当事者研究」の普及を推進するのは、「当事者研究」が「制御」され、陳腐なものになるのを促進するだけだと思われる。

おわりに

本論では、SHG と「当事者研究」に関する先行研究を踏まえ、ひきこもりサミットの「当事者研究」を実践し、そこで得られた知見を手がかりとして、従来の SHG 論を批判的に検討した。まず、ひきこもりサミットの「運営の困難さ」の解決方法として、①「変に組織化」することなく、“素朴な感情”を大事に活動していくこと。②筆者も運営者ではなく、ひとりのメンバーとして活動を楽しむことの２点が挙げられた。また、「当事者研究」というアプローチこそ、ひきこもりサミットを含む SHG とされる当事者グループにおける「SHG 運営の困難さ」を解決する方法として最も理想的なアプローチであることを示した。

また、ひきこもりサミットをはじめとする日本の多くの SHG とされる当事者グループで「SHG 運営の困難さ」といった問題が生じている背景には、当事者同士の相互援助を強く動機づけるような客観的な定義を SHG という当事者グループに対して専門家がなしてきたことにある可能性を示した。専門家による「研究」を通して生み出されてきた SHG 言説によって、SHG とされる当事者グループはその活動方針を水路づけられ、社会資源や援助形態として機能することが期待されてきたことを明らかにした。そして、そのような SHG の外部で作られた多くの「価値」に振り回される形で「変に組織化」するのではなく、“素朴な感情”に基づいて活動を継続していく“原初的な SHG”という抵抗のあり方を示した。

従来の SHG 論を批判していく中で、筆者は、SHG とは本来ハンナ・アーレントの言う「現われの空間」として機能することにこそ意義があるとした。そこから、セルフヘルプとは、なによりもまず、個人が有する「自分自身を生きたい！」という強い意志のことであり、SHG とは、「現われの空間」のような空間の創成と共有を志す、「自分自身を生きたい！」という強い意志を持つ当事者で集まり、「自分自身を生きる」ための諸実践を行うグループであると、それぞれ再定義された。

最後に、筆者の経験なども踏まえ、SHG や「当事者研究」といった、当事者が編み出す「生きるための技法」が既存の知の体系に取り込まれがちであることを指摘し、SHG を「研究」してきた本論の知見を手がかりとして、「当事者研究」という新しい当事者発信の技法が「制御」されないための手立てを示した。つまり、「当事者研究」を実践する者としての「当事者研究者」は、その魅力を周囲に発信していく中で感染者を増やし、この社会の中に「現われの空間」を拡張していく役割を担う存在なのではないかということである。このような一大プロジェクトは、遅々として進まないかもしれないが、あくまでも「はやく、ゆっくり」と行えばよく、「当事者研究者」が“ワクワク感”や“楽しさ”といった“素朴な感情”の下に実践し続けることにこそ意味があることを示した。この観点から、熊谷(2017)のように「みんなの当事者研究」といったような形で広く一般に啓蒙するようなやり方は、「当事者研究」が「制御」され、陳腐なものになるのを促進するものであると批判した。

以下で、本論に残された課題を２つ挙げる。１つ目は、従来の SHG 研究は、今後、歴史的な観点からより綿密な批判を加えられる必要があると言うことである。一体、どのような立場の人間がどのような意図を持って SHG という言葉を作り、行政などの政策にいつから、SHG に相当するような概念が記されるようになったのかなど、様々な角度から検討し、誰がどのような立場からどのような意図を持って SHG という概念を語ってきたのかより詳細に検証する必要があるだろう。２つ目は“原初的な SHG”と「当事者研究」との関係性についてだ。本論で、筆者の考える SHG や「当事者研究」といった「生きるための技法」が目指す方向性について、その青写真を記すことができたと思っている。だがそもそも、筆者は、SHG と「当事者研究」とは密接なつながりがあり、２つの「生きるための技法」には、さほど差異はないと考えている。その根拠の１つは、先に引用した F さんがインタビューで述べていた言葉にある。インタビューの中で彼女は、“原初的な SHG”としてのひきこもりサミットは、それぞれが経験してきた事柄を互いに話し合う際、「別に「かわいそうだね」とかそういう話じゃなくて、「じゃあ、それってどういうことだったのかな」っていうのが一緒に読み解ける」ような「おもしろい場所」であるとしている。これはつまり、“素朴な感情”を大事に、様々な背景を持つ人が集う“原初的な SHG”では、従来言われているような「当事者研究」が、ワクワクするような楽しい活動の一環として、自然と行われるようになるものであるということを示唆していると言える。このような“原初的な SHG”と「当事者研究」との関係性について、本論では具体的に触れることができなかったので、今後の課題としたい。

物心ついてから、ずっと「死にたい」気持ちと共生してきた―「鬱ってなんですか？」と平然と言ってのけるような―どうやらとてもめんどうくさいらしい自分と今まで関わって来てくださったすべての方々に、この場をお借りして深く御礼申し上げたい。ひきこもりサミットと「川田八空」の「当事者研究」の成果物としての本論を読んで頂いた方の中に、何か少しでも感じるものを残せたとしたら、それは執筆者としてこの上ない悦びです。

参考・引用文献

安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也, 2012,『生の技法―家と施設を出て暮らす障害者の社会学』生活書院

綾屋紗月＋熊谷晋一郎, 2008,『発達障害当事者研究―ゆっくりていねいにつながりたい』医学書院

綾屋紗月, 2010,「仲間とのつながりとしがらみ」熊谷晋一郎・綾屋紗月『つながりの作法―同じでもなく違うでもなく』NHK 出版

――――, 2017,「当事者研究をはじめよう！―当事者研究のやり方研究」熊谷晋一郎編著『臨床心理学増刊第 9 号―みんなの当事者研究』金剛出版

石川准, 2000,「感情管理社会の感情言説―作為的でも自然でもないもの」『思想』907, 41-61. 岩波書店

―――, 2004,『見えないものと見えるもの―社交とアシストの障害学』医学書院

石川亮太郎・小林茂, 2017,「浦河べてるの家の縦断研究」熊谷晋一郎編著『臨床心理学増刊第 9 号―みんなの当事者研究』金剛出版

石原孝二, 2013,「当事者研究とは何か―その理念と展開」石原孝二編著『当事者研究の研究』医学書院

稲沢公一, 2002,「セルフヘルプ・グループの原理―相互支援原理を中心に」『保健の科学』44(7). 489-492.

岩田泰夫, 2008,『セルフヘルプグループへの招待―患者会や家族会の進め方ガイドブック』川島書店

岩間文雄, 1998,「セルフヘルプグループへの支援―専門職が担うことのできる役割とは何か」『ソーシャルワーク研究』23(4). 285-290.

岡田洋一, 2015,「アルコール臨床における医療的支援と非医療的支援の重なり―アルコールリハビリテーションプログラムとセルフヘルプグループに着目して」『鹿児島国際大学福祉社会学部論集』34(2). 32-43.

岡知史, 1985,「セルフ・ヘルプ・グループ（SHG）の機能について―その社会的機能と治療的機能の相互関係」『大阪市立大学社会福祉研究会研究紀要』4. 73-93.

―――, 1990 a,「日本におけるセルフヘルプ―そこにみられる相互扶助の伝統と自立＝解放運動の流れをめぐって」『上智大学社会福祉研究』14. 4-31.

―――, 1990b,「欧米のセルフヘルプグループの概念規定について―その思想的・歴史的背景から」『大阪市立大学社会福祉研究会研究紀要』7. 47-58.

―――, 1990c, 「セルフヘルプグループの概念をめぐって―欧米の代表的な概念の研究を参照しながら」『社会福祉学』31(1). 103-127.

―――, 1992,「日本のセルフヘルプグループの基本的要素「まじわり」「ひとりだち」「ときはなち」」『社会福祉学』33(2). 118-136.

―――, 1994,「「わかちあい」「ときはなち」「ひとりだち」の運動～セルフヘルプグループ（本人の会）をいかに理解するか」『月間福祉』77(1). 64-68.

―――, 2000,「セルフヘルプグループの歴史・概念・理論―国際的な視野から」『作業療法ジャーナル』34. 718-722.

―――, 2002,「仲間意識と会員意識の乖離―SHG の「会員二極化」仮説」日本社会福祉学

会第 50 回記念大会発表原稿
岡知史・Thomasina Borkman, 2011,「セルフヘルプグループとセルフヘルプ・サポーター、そしてソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』37(3). 168-183.
河崎寛＋向谷地生良, 2005,「ライブ！当事者研究ができるまで」浦河べてるの家編『べてるの家の「当事者研究」』医学書院
川村敏明・向谷地生良, 2006,「べてるウイルス感染症候群の研究」向谷地生良・浦河べてるの家編著『安心して絶望できる人生』NHK 出版
川田八空, 2017,「ひきこもりサミットの変遷にみる「運営の困難性」―セルフヘルプグループにおける世話人の立場性を問う」学部生レポート
貴戸理恵, 2004,『不登校は終わらない―「選択」の物語から〈当事者〉の語りへ』新曜社
久保紘章, 1981,「セルフ・ヘルプ・グループについて」『ソーシャルワーク研究』6(4). 250-256.
――――, 1998,「セルフヘルプ・グループとは何か」久保紘章・石川到覚編著『セルフヘルプ・グループの理論と展開―わが国の実践をふまえて』中央法規出版
熊谷晋一郎＋國分功一郎, 2017,「来たるべき当事者研究―当事者研究の未来と中動態の世界」熊谷晋一郎編著『臨床心理学増刊第 9 号―みんなの当事者研究』金剛出版
熊谷晋一郎, 2017,「当事者研究の支援効果に関するエビデンス」熊谷晋一郎編著『臨床心理学増刊第 9 号―みんなの当事者研究』金剛出版
斎藤学, 1995,『魂の家族を求めて―私のセルフヘルプ・グループ論』日本評論社
齋藤純一, 2000,『公共性』岩波書店
佐藤俊樹, 2011,『社会学の方法―その歴史と構造』ミネルヴァ書房
千年よしみ・阿部彩, 2000,「フォーカス・グループ・ディスカッションの手法と課題：ケーススタディを通じて」『人口問題研究』56(3). 56-69.
高松里, 1989,「セルフ・ヘルプ・グループ―その概要と心理臨床家の関わり」『心理臨床』2(4). 319-324.
田中英樹, 2001,『精神障害者の地域生活支援―統合的生活モデルとコミュニティソーシャルワーク』中央法規出版
中嶋正人, 2017,「統合失調症の当事者研究」熊谷晋一郎編著『臨床心理学増刊第 9 号―みんなの当事者研究』金剛出版
中田智恵海, 2003,「セルフヘルプグループ運営上の課題とセルフヘルプ支援センターの役割」『社会福祉実践理論研究』12. 75-85.
――――――, 2015,「セルフヘルプ支援センターの課題と可能性」『佛教大学社会福祉学部論集』11.61-78.
中田喜一, 2012,「日本のセルフヘルプグループ言説の歴史社会学―1970 年から現在まで」角崎洋平・松田有紀子編著『歴史から現在への学際的アプローチ』立命館大学グローバル COE プログラム「生存学」創成拠点
中村英代, 2011,『摂食障害の語り―〈回復〉の臨床社会学』新曜社
野崎泰伸, 2011,『生を肯定する倫理へ―障害学の視点から』白澤社
半澤節子, 2001,『当事者に学ぶ―精神障害者のセルフヘルプ - グループと専門職の支援』やどかり出版
松田博幸, 1994,「セルフヘルプ・グループと専門職者による専門性の共有の課題―セルフヘルプ・クリアリングハウスの実践より」『社会問題研究』43(2). 353-376.

————, 2002,「セルフヘルプ・グループに対するサポートを考える―わが国におけるセルフヘルプ・クリアリングハウスの活動より」『生活教育』46(5). 46-51.
三島一郎, 1997,「セルフ・ヘルプ・グループの機能と役割―その可能性と限界」『コミュニティ心理学研究』1(1). 82-93.
————, 1998,「セルフヘルプ・グループの機能と役割」久保紘章・石川到覚編著『セルフヘルプ・グループの理論と展開―わが国の実践をふまえて』中央法規出版
見田宗介, 2008,『まなざしの地獄―尽きなく生きることの社会学』河出書房新社
三好真人, 2014a,「セルフヘルプ・グループ運営者の抱える問題の検討」『臨床心理学』14(5). 693-703.
————, 2014b,「セルフヘルプ・グループへ参加者が定着することに関する要因の分析―「NPO 法人・生活の発見会」におけるケース研究」『日本森田療法学会雑誌』25. 141-150.
————, 2015,「日本におけるセルフヘルプ・グループへの期待と問題の現状」『文学研究論集』42. 51-69.
向谷地生良, 2002,「公私混同大歓迎」浦河べてるの家編『べてるの家の「非」援助論』医学書院
————, 2005,「序にかえて―「当事者研究」とは何か」浦河べてるの家編『べてるの家の「当事者研究」』医学書院
————, 2005,「わたしはこの仕事に人生をかけない」浦河べてるの家編『べてるの家の「当事者研究」』医学書院
————, 2005,「あとがき―「自分自身で、共に」から始まるもの」浦河べてるの家編『べてるの家の「当事者研究」』医学書院
————, 2006a,「自分自身で、共に―弱さを絆に、苦労を取り戻す」向谷地生良・浦河べてるの家編著『安心して絶望できる人生』NHK 出版
————, 2006b,『べてるの家から吹く風』いのちのことば社
村山正治, 1979,「心理療法とセルフ・ヘルプ・カウンセリング」村山正治・上里一郎編著『セルフ・ヘルプ・カウンセリング』福村出版
横塚晃一, 2007,『母よ！殺すな』生活書院
Hannah Arendt, 1958,"The Human condition", Chicago University Press. (=1994 志水速雄訳『人間の条件』 ちくま学芸文庫.)
Kant, 1784,"BEANTWORTUNG DER FRAGE：WAS IST AUFKLARUNG"(=1950 篠田英雄訳『啓蒙とは何か―他四篇』 岩波文庫)
W. Said, Edward, 1978,"Orientalism", Pantheon Books. (=1993 今村紀子訳『オリエンタリズム』上下巻 平凡社ライブラリー.)

図表

図４－１

SHG 周辺を巡る循環モデル

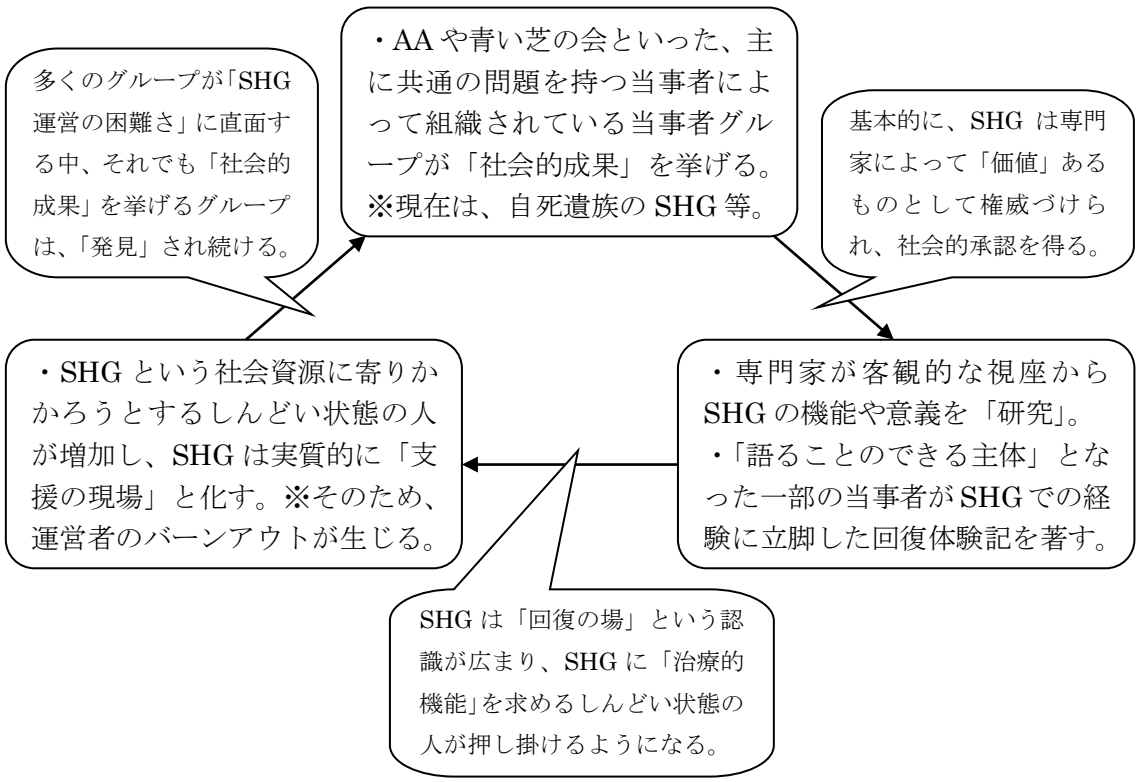

表３－１

調査対象者のプロフィール

対象者	年齢	性別	身分	プロフィール
やそら（筆者）	20 代前半	男性	大学生	虐待サバイバー。小中学校では優等生。高校時代に不登校になり、躁うつの症状も出てくる。無事大学入学するも留年。その後、ひょんなことから、ひきこもりサミットを組織することになる。
C さん	20 代後半	女性	事務職	高校時代、地域のフリースペースに通い、半ば不登校状態であった。大学に入るとデリヘル嬢をはじめ、数年間働いた。ひきこもりサミットの集まりへの出席率が最も高いメンバーでもある。
T さん	20 代後半	女性	福祉職	高校時代、ひきこもり状態になり、高校を中退。約5年間のひきこもり期間のほとんどを家の中で過ごした。ひきこもりサミットが組織されるきっかけとなった、音信不通になったその人である。
F さん	20 代後半	女性	大学院生	中学・高校時代と不登校気味だった。F さんが大学で開講されていた「ひきこもりの社会学」を受講していた際、筆者も受講していたのがきっかけとなり知り合い、親交を持つようになった。